



神戸大学大学院 人間発達環境学研究科

Graduate School of Human Development and Environment

人間発達環境学研究科とは

21世紀を迎え、科学技術の進化を背景に社会経済における高度情報化やグローバル化が急激に進展し、人類の更なる発展が期待できる状況にあります。しかしその反面、この動きは価値観の衝突や知識・富の偏在の遠因にもなり、多くの国や地域では、人間の自由な発達を阻害する深刻な事態も数多く発生しています。

このようななか、私たちは、人間の発達(human development)とは何か、そしてそれはどうすれば可能か、という根本的な問いと向き合い、より実践的な観点から早急に具体的な解を導くことを強く要請されています。もとより、容易な課題ではありません。なぜなら、人間の発達を真に捉えるためには、人間それ自身だけでなく、人間をとりまく環境にも注意深く関心をいただき、人類の叡智

教育の特色

博士課程前期課程の特色

博士課程前期課程では、人間の発達やそれを取り巻く環境の発展に関わる基礎的あるいは応用的・実践的な教育・研究活動に対し、学生の主体的参加を促し、高度な専門的能力を備えた人材の養成をめざしています。このため、本研究科では、個々の学生が本研究科在学中のあらゆる機会を通じて知識・スキル・能力・資質とそれらの自己開発力を獲得できるよう、学生の「学び」をトータルにプロデュースし支援する体制をとっています。以下のような特色をもつ、学ぶ側の立場に立った能力開発支援型の教育プログラムです。

●研究科共通科目(「ヒューマンコミュニティ創成研究」)の設定

研究科共通科目「ヒューマンコミュニティ創成研究」において、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、のびやかスペース「あーち」、サイエンスショップなどを活用した産学官民協働のフィールド研究活動に積極的に参画し、それらの活動を通して、ヒューマン・コミュニティ創成のマインドを醸成します。

●特別研究Ⅰ・Ⅱの設定

研究科共通科目「特別研究Ⅰ」において、文献調査法や資料収集法、フィールドワークやアクション・リサーチの技法など、研究に必要な方法論の基本的手法を修得することで研究能力の基礎を固めます。さらに共通科目「特別研究Ⅱ」において、フィールドワークやワークショップ、プロジェクト研究や作品展など、研究の実際の場面に関わることで、研究遂行のための実際的手法を修得します。

これらの「特別研究」では、主指導教員の個別的な指導のほかに、副指導教員を含む他専門の教員による指導助言を受けたり、学生相互の意見交換を行う機会を積極的に設けます。学生は、多様な見方・意見の自由な交流をとおして自らの解を主体的・自律的に導くことができます。

●個々の学習課題に応える積み上げ方式の専門教育

全般的な専門力量の形成を支援するために、人間発達専攻では専攻共通科目(「人間発達総合研究Ⅰ・Ⅱ」「人間発達関連研究」「人間発達研究」)を置いているほか、個々の研究課題に応じたコース・ワークが可能になるように、専門科目は、基礎科目(「特論Ⅰ」など)、展開科目(「演習」など)および関連科目から構成される積み上げ方式のカリキュラム構成をとっています。特に「演習」では、開発するスキル群をシラバスに明記し、スキル開発を重視しています。

●複数教員による指導体制

本研究科では、主指導教員1名のほかに副指導教員2名をおき、副指導教員には、異なる専門分野でありながら学生の研究内容に関連する

を結集しながら多面的かつ重層的に研究していくことが求められるからです。

人間発達環境学研究科は、これらの課題に応えるため、「ヒューマン・コミュニティ創成研究」という理念に基づいて、文系・理系の理論や学内外の実践的知見を総動員し、より総合的な観点から人間発達研究に新たな学問的地平を拓くことを目的とした大学院です。「ヒューマン・コミュニティ創成研究」とは、大学が地域、行政、企業、NPO、NGO、市民と連携しながら、より実践的な観点から人間的な社会(ヒューマン・コミュニティ)の創成をめざす教育研究活動の総体を意味し、本研究科における教育研究の特徴を示しています。

領域の教員があたるように配慮しています。これらの教員間の協議に基づき綿密な研究指導を行うことで、高い専門性とともに幅広い視野を備えた独創性・創造性をもつ人材を養成するところにねらいがあります。また、後期課程進学志望者については、1年次での学会参加、2年次での学会発表を支援します。

●取得できる学位と後期課程への進学

前期課程では、修士(学術)が基本ですが、教育研究内容によっては、教育・学習専攻においては修士(教育学)、人間環境学専攻においては修士(理学)を取得することができます。また、前期課程を修了した者が引き続き後期課程に進学を希望する場合は、選考の上、進学することができます。後期課程への入学科は必要ありません。

●先端的研究に協働する「研究道場」の設置(人間発達専攻)

人間発達研究の特定分野において、特に優れた大学教員・研究者を養成するため、教員が共同で進める先端的研究の場に学生が参加し協働する体制として「研究道場」を設置し、学生が実践的な研究力量を身につけ、研究者として早期に自立できる素養を習得できるようにします。

●ソフトスキルや社会人基礎力の育成

専攻レベル、研究室レベルで実施されている諸活動(専攻研究セミナー、修士論文発表会など)について、「参加」「運営」といった役割を担うことを通して、コミュニケーション・スキル、ネゴシエーション・スキル、企画力、マネジメント・スキル、チームワーク・スキル、リーダーシップ・スキルといったソフトスキルや社会人基礎力の育成を支援します。

●長期履修制度や柔軟・適切な教育方法の実施(社会人学生)

社会人学生については、長期履修制度を設けるとともに、学習の機会が制約されないよう、(大学設置基準第14条に定める教育方法の特例にもとづく)夜間・休日開講など、柔軟かつ適切な教育方法を実施します。



求める学生像

人間発達環境学研究科は、人間の発達及びそれを取り巻く環境に関わる基礎的並びに応用的・実践的な教育研究活動に主体的に参加し、これを推進する指導的役割を担える高度な専門的能力を有する人材の養成を目指しています。そのため、次のような資質・能力を持った学生を積極的に受け入れます。

- 高度な研究を遂行していくための基礎的な資質・能力
- 人間の発達や環境に関する諸課題に対する鋭敏な感受性と深い専門知識にもとづいて新しい課題を析出していく資質・能力
- 多角的かつ重層的に課題を分析・考察し、体系的に概念化と理論化を行うことができる高度な知的能力
- 現代的諸問題を解決するための具体的方策を提案し、柔軟に対応できる行動力



博士課程後期課程の特色

博士課程後期課程では、人間の発達やそれを取り巻く環境の発展に関わる原理的あるいは応用的・実践的な教育研究活動に対し、学生の主体的参加を促し、高度な専門的能力だけでなく、独創的で卓越した研究能力を備えた人材の養成をめざしています。そのため、本研究科では、以下の特色をもつ教育プログラムのもとで、学生が、自らの専門を深めるだけでなく、多角的かつ相対的に捉えることにより、自らの専門のアイデンティティを練り上げることができる高度な学問的能力を身に付けるようにします。

●特別研究Ⅲ・Ⅳの設定

研究科共通科目「特別研究Ⅲ」において、文献課題やレビュー論文の作成などを通して、国内外の研究状況を把握するための能力発展をめざします。また、本研究科が開催する「学術Weeks」等での研究発表をとおして、国際学会での発表の基盤を固めます。共通科目「特別研究Ⅳ」では、フィールドワークやワークショップ、研究会、学会、プロジェクト研究などの企画・運営に参画し、研究を組織化する方法を修得します。また、国際的な論文の作成能力を養成します。

●専門力量の深化

さらなる専門力量の深化をめざした高度化科目(特論Ⅱ)を展開します。

●体系的な博士論文作成指導システムの提供

前期課程、後期課程の5年間で円滑に博士論文を作成できるようにするため、複数教員による体系的な論文作成指導システム(基礎論文、予備審査論文、公開最終試験)が準備されています。

●先端的研究に協働する「研究道場」の設置(人間発達専攻)

人間発達研究の特定分野において、特に優れた大学教員・研究者を養成するため、教員が共同で進める先端的研究の場に学生が参加し協働する体制として「研究道場」を設置し、学生が実践的な研究力量を身につけ、研究者として早期に自立できる素養を習得できるようにします。

●実践的な教育力の涵養支援

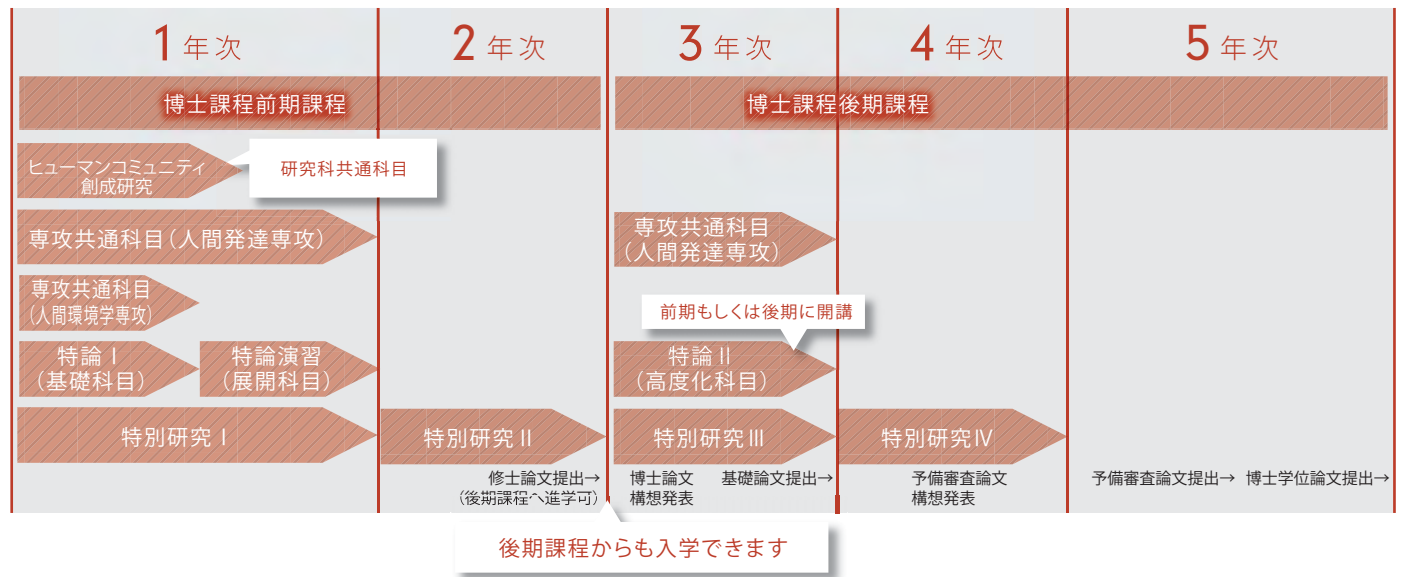
大学教員をめざす学生に対して、学部教育実習に相当する科目「教育能力養成演習」の履修により、実践的な教育力の開発を支援します。

●取得できる学位

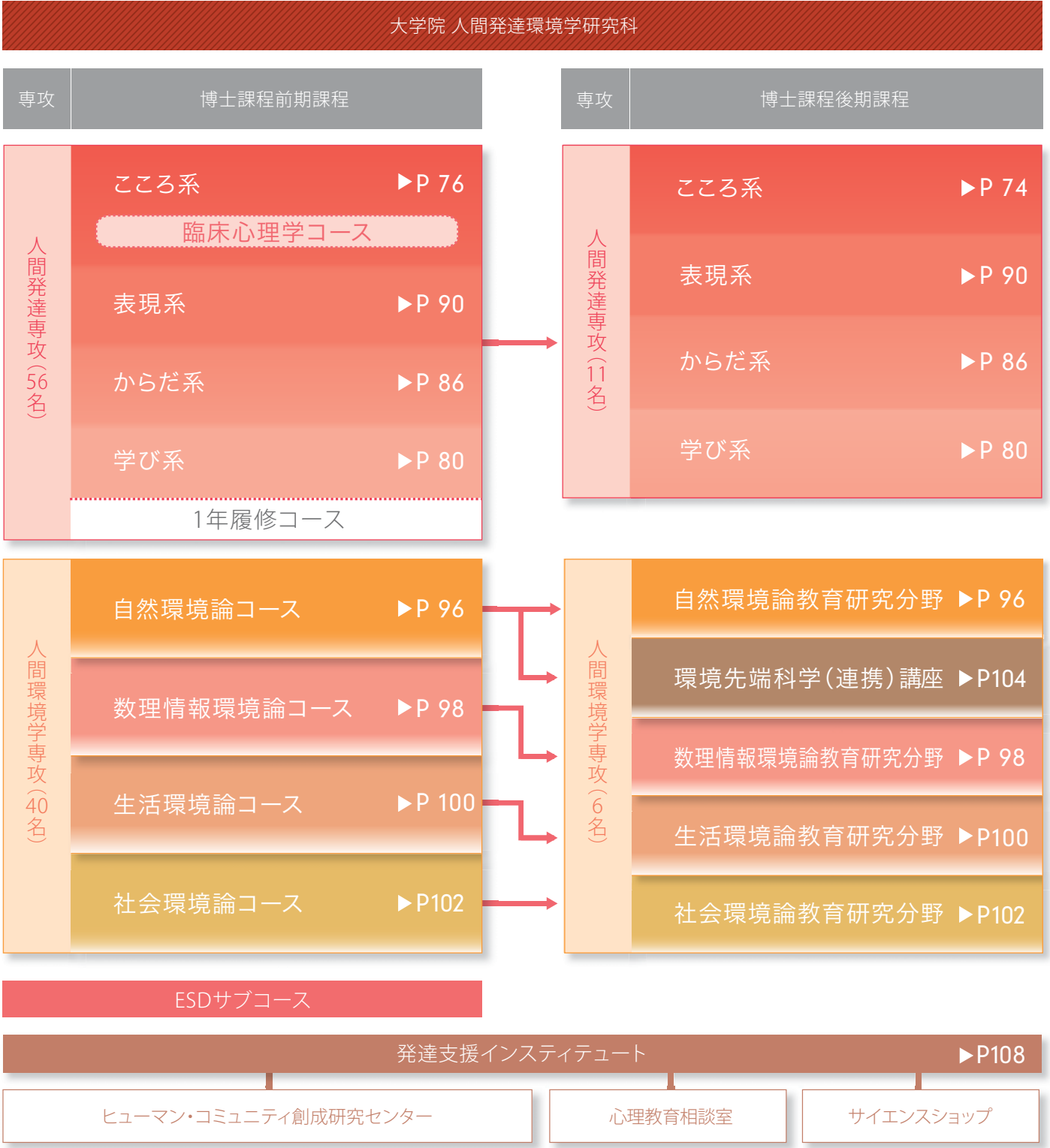
博士(学術)を基本としますが、教育研究内容によっては、人間発達専攻においては博士(教育学)、人間環境学専攻においては博士(理学)を取得することもできます。



研究科のカリキュラム



研究科構成図



ESDサブコースは、「持続可能な開発のための教育:Education for Sustainable Development」の理論と実践について学ぶことを目的としたコースです。環境、人権、開発、防災、経済など、多様な課題の解決について、教育の観点から考究し行動することのできる国際人の育成をめざしています。次のような授業によって構成されており、このコースの修了生には、ESD Advanced Practitioner の認証が付与されます。(学部の神戸大学ESDコースも参照すること。p.63)

＜主な授業＞**ESD基礎科目群**:人間発達と人間環境の相互性を軸とした講義。

ESD研究:英語による授業。人権、開発、共生などをテーマとしたESDの知見を知るための講義とディスカッション。

ESD研究演習:スタディツアーをはじめとしたアクションを伴った学習に取り組み、リサーチペーパーに結実させる。

研究トピックス

TOPICS 1 “アクティブ・エイジング”プロジェクト 「多世代を対象としたウェルビーイング(well-being)なコミュニティづくりをめざした支援プログラム開発の試み」

わが国の人口の少子高齢化は、医療・福祉領域にとどまらず、経済・産業・文化など広範で複雑な課題を生み出しています。また、これら多くの課題は日々の生活の中にみられることから、生活の場であるコミュニティの課題を明らかにし、それを解決することは重要な取り組みといえます。この取り組みには、研究者グループの分野横断的・学際的アプローチに加え、研究者が自治体、住民、企業などと協働し、世代を超えた人々の参画のもと、健康を維持しながら社会参加ができる、安全な生活の場としてのアクティブ・エイジングに根ざした新しいコミュニティを創出することが求められています。

そこで、本研究プロジェクトでは「健康」「社会参加」「安全・安心」「多世代交流」の観点から、地域コミュニティの様々な問題を明らかにするとともに、それらの解決に向け、教員が地域住民、行政、及び企業と協働し、学びと活動の基礎となる“場”を形成します。そして、その“場”を利用したプログラムの開発と地域への実装を行う計画が進行中です。

なお、このプロジェクトは2011年度から立ち上げた健康増進支援プロジェクトの実績を基に、多領域横断型の発達研究への展開をめざしたプロジェクトで、2012年度から日本学術振興会、行政、企業からの支援を受けて実施しています。



TOPICS 2 ESD海外実践研究 「海外フィールドワークで現実を直視し問題の本質に迫る」

韓国随一の障害学生支援を展開し、障害学生と非障害学生の寮での共同生活や、知的障害学生の高等教育プログラム開発など、ユニークな取り組みを行っているナザレ大学とは、2008年度から活発な交流を行っています。毎年どちらかの大学で、日韓学術シンポジウムを開催し、学生主導の共同研究を進展させてきています。2014年春には、博士課程の学生が中心になってナザレ大学で学ぶ知的障害学生を対象とした研究論文を共同執筆し、同時に調査チームがナザレ大学を訪問し、各種調査の他、授業参観や関係者との討議を行いました。2014年のテーマは、障害学生と非障害学生が大学寮で共同生活をし、大学で一緒に学ぶことの意義を追究するというものでした。この研究グループは、学生中心の日韓共同研究チームです。調査旅行では、ナザレ大学の学生にインタビューを行ったり、大学寮で生活する学生を対象にアンケートを行いました。学生にとっては、障害者福祉や障害児教育などの中心テーマのみならず、日韓の文化的差異や制度的背景への理解が求められ、また研究対象との関係性、コミュニケーションの問題について討議する機会にもなります。



TOPICS 3 学術Weeks 「国内・国際交流研究会を軸として学際的研究を推進する」

学術Weeksは、教員、大学院生、大学生が総体となり、国内・国際交流研究会ならびに研究活動報告会を企画、実践するもので、2008年度から11月頃に毎年実施しています。これらの実践活動を通して、個人ならびにグループの研究を鳥瞰的に見つめ直し、研究能力の向上を図ることが目的の一つです。また、本研究科で行われている多様な研究領域について、教員、大学院生、大学生が異なる学術分野の枠を超えて交流するように多角的に工夫されており、新たな学際的研究を生むフィールドとしても期待されます。

2014年度の学術WEEKSの企画は11。国内外の研究者を招へいたシンポジウムや、各種学会との連携のワークショップ、コンサートやオペラ、海外の教員や福祉関係者、行政担当者とのフィールドワーク等が実施されました。日本の現場を知り、国内外の方と英語によるディスカッションを行うなど、国境を越えた問題の解決を志向する交流が図られました。グローバル化社会における研究者や実践者としてのキャリア育成の機能をはたしています。



研究トピックス

TOPICS
4

教育基礎研究道場

「先端的研究と議論の場で
優れた大学教員・研究者を養成する」

人間発達研究としての教育学関連分野において、教育学の学位を志向した特に優れた大学教員・研究者を養成するため、教員が共同で進める先端的研究や議論の場に学生が参加し協働する体制として本研究道場を設置しています。具体的には、本研究道場では、道場特別講義等を通して、参加する学生が実践的な研究力量を身につけ、教育学関連分野の研究者として自立できる素養を習得できるように鍛えます。

2014年度には、研究道場特別講義を19回、研究道場論文合評会を1回開催しました。研究道場特別講義では、優れた研究に取り組まれている研究者を多数招聘し、研究の最前線についてご講演頂きました。参加学生は研究力量の向上をめざし、積極的にグループワークや討論を行い、講演内容に関する理解を深めました。研究道場論文合評会では、論文の相互批評を行い、評者の立場を経験することで、自らの論文をより客観的に評価する力量を高めました。

TOPICS
5

高度教員養成プログラム

「参画型実践研究を基盤として
高度な専門性を有する教員を養成する」

知識基盤社会をリードできる高度な能力を備えた教員の養成が重要な課題となっています。そのため、修士論文として附属校園等を活用したアクションリサーチによる実証的研究に取り組むとともに、専修免許を取得し、将来教職を目指す博士課程前期課程在籍学生を対象に本プログラムを実施しています。

本プログラムの第一の特徴は、高い専門性に基づく教科内容研究と、適切な指導法研究の結びつきを重視している点です。教科内容研究だけでは、内容に関する見識は向上するものの、それを効果的に学習者の発達に活かす視点は希薄になります。一方、教科内容研究と切り離された指導法研究は、便利なノウハウの開発にとどまる危険性があります。双方を有機的に結びつけることが重要です。

第二の特徴は、論理的な分析のみでなく、感性による気づきを重視し、表現することを重視している点です。有能な実践家は、合理的に分別されたり完全に記述したりできない現象を認識することができると言われています。学生の気づきを重視し、それを多様な方法で表現し、認識を深めることを促しています。

これらを基盤として、授業をデザイン・評価する際の枠組みを構成し、さらに再構成する力量を備えた、ダイナミックに成長することのできる教員の養成を目指しています。

TOPICS
6

マスターズ甲子園

「大会企画・運営の実践からスポーツ
プロモーションを学ぶ」

「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものです。神戸大学発達科学部内のスポーツプロモーション研究室に2004年から大会事務局とマスターズ甲子園の主催団体である全国高校野球OBクラブ連合の事務局を併設し、現在、全国高校野球OBクラブ連合には34都道府県、約500校のOB校からなる約2万人が登録しています。さらに各地方予選組織と本大会を支える各種民間団体や行政組織との連携事業として本プロジェクトを進めています。2014年11月に第11回大会を開催し、神戸大学の発達科学部の学生や卒業生を中心として、全国からの大学生ボランティアがこの大会運営を支えました。本学部が中心となったアクションリサーチと共に、スポーツ振興や生涯教育、老年学等のテーマに興味を持つ大学生が、成人・中高年のスポーツ活動支援や生きがい創造支援を実践から学ぶ機会としても機能しています。

TOPICS
7

人間環境学専攻研究プロジェクト

「生活安心指標の考案・質の高い生活を実現する
人間環境の総合的アプローチとその指標化」

安心で暮らしやすい生活とはいかなるものか、またそれを実現するためにはどのような条件が満たされなければならないのか、さらに課題は何かという問題を、「人間発達」およびそれを支える「人間環境」の視点から総合的に検討し、可視化する指標を考案することを目的としています。

近年、人間の生活のあり方を経済面のみならず社会資本、主観的満足度などのさまざまな観点から根本的に捉えなおそうと議論が活発となっています。グローバル化の進行にともない不安定な経済構造や、住みにくい生活環境が露呈したことに対する危機感を背景に、従来とは異なる視点からの社会を見直そうという模索が始まったのです。しかし、これまでの議論において、主体が能動的に思考し行動する「人間発達」という観点は弱いというのが実態です。

本研究は、自然・社会条件に制約されながらも自律的に生きていこうとする主体としての人間へのまなざしを重視して社会科学、人文科学、自然科学が重ねてきた研究蓄積をもとに、「人々が安心できる生活」を再考しようという試みです。そして、その検討成果をさらに「生活安心指標」として可視化する作業を行う予定です。

TOPICS
8

人間環境学専攻研究プロジェクト

「都市域における人と
生物多様性のつながり」

国連が2011年からの10年を「生物多様性の10年」と位置づけるなど、生物多様性保全は21世紀の重要な環境課題です。世界的に、都市への人口集中が急速に進む中で、都市近郊における生物多様性の保全はその最前線のひとつと位置付けられています。日本のメガシティの一つ阪神地区は、六甲山系・生駒山系等と大阪湾に囲まれ、大都市近郊に豊かな自然が存する国際的にもユニークな特徴を有しています。この地域特性を活かし、研究フィールドとすることで、都市住民と生物多様性の関係の在り方を学際的・統合的に研究し、21世紀社会における生物多様性と共生する都市モデルを探り、国際社会に向けて発信することを目指しています。特に、神戸市は独自に生物多様性神戸プラン2020を作成するなど「人と自然がつながり、多様ないのちを育む自然共生都市“こうべ”」を目指しており、本研究を行う絶好のフィールドです。

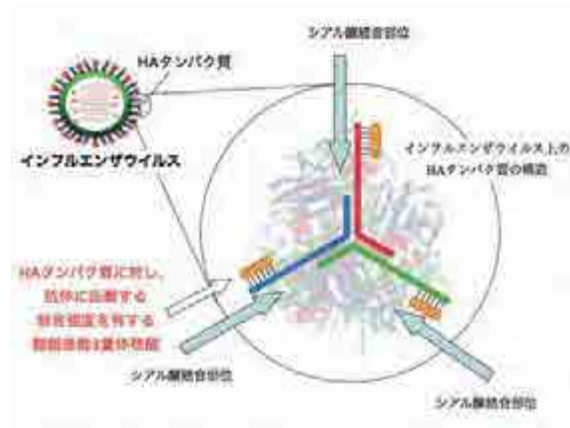
本プロジェクトは、生物学、地理学、環境経済学、教育学、サイエンスコミュニケーションをそれぞれ専門とする多様な研究者が共存する人間発達環境学研究科の特性を最大限に活かして展開します。

TOPICS
9

人間環境学専攻研究プロジェクト

「環境ストレスと疾病リスクを
客観的に評価するシステムの開発」

本プロジェクトでは、人間の健康の維持、および心理的、物理的疾患の予防を目指し、ストレス（心理的要因、物理的要因（電磁波、紫外線他）など）や、疾病のリスクを迅速かつ客観的に定量化し評価できるシステムを構築することを目的としています。そのために、研究科内で、公衆衛生学、環境バイオテクノロジー、ヒューマンエレクトロニクス、分析化学、高分子材料科学、マイクロ流体工学を専門とする教員に協力していただき、研究を進めています。一例として、糖鎖修飾核酸を用いたインフルエンザウイルスの高感度検出システムの開発を始めています。医療機関で用いられる従来の診断キットにおいては、ウイルスに対する抗体が塗布されていますが、抗体は製造に時間とコストがかかり、また安定性も十分ではありません。また変異したウイルスに対しては感度が低下する可能性も指摘されています。本研究ではインフルエンザウイルス表面に存在するヘマグルチニンタンパク質を認識する人工核酸を用いることで、抗体よりも安定でかつ、ヒト型、トリ型、またこれらが変異した新型ウイルスに対しても高感度検出が可能なシステムを作りたいと考えています。



人間発達専攻

専攻の理念

人間の発達には、すべての人がもつかけがえのない個性を前提とする概念です。1人ひとりの人間は、さまざまな潜在能力をその人に固有の道筋で開花させていくのであり、それを人間の発達と呼ぶことができます。ですから、実際に現れる発達の様相は、とても多様で複雑です。「人間発達専攻」は一筋縄では捉えられない人間の発達と向き合おうとするとき、関連する学問分野が相互につながり、それぞれに蓄積された学問的知見を有機的に結びつける“学問領域複合型人間発達研究”こそ、発達の実像の解明に効果的であると考えています。

人間発達環境学研究科は、「人間それ自体の発達」に関わる教育・研究のあり方をさらに高度化、総合化していきます。新たにスタートする人間発達専攻は、今までの心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻という4つの専攻を統合し、これまで蓄積したそのエネルギーを1つの専攻に集中させることで、人間発達研究の新たな一歩を踏み出します。



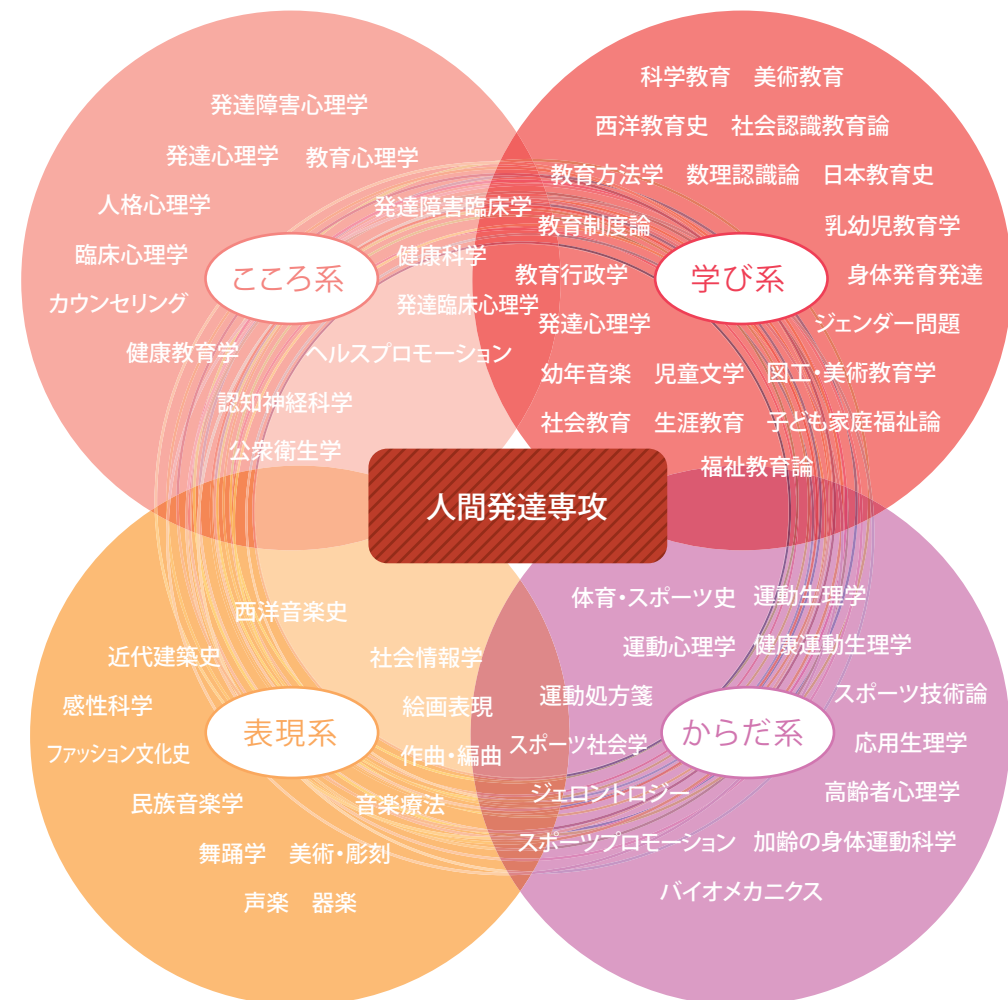
人間発達専攻は、もうひとつの専攻である人間環境学専攻とともに、急激に変容する今日の状況に柔軟に対応するためパワーアップを図り、人間発達環境学研究科を支える“車の両輪”として、これまでに以上に充実した教育・研究を提供していきます。

専攻長からのメッセージ

専攻長 稲垣 哲成 教授

人間発達専攻は、多様な側面を持つ人間それ自身の発達を総合的な視点から教育研究対象とし、前期課程においては、人間の発達に関する実践的諸課題の解決やそれを支える新たな公共の創出に貢献する高度専門職業人の養成を目的とし、後期課程においては、人間発達に関する高度な専門的学識及び創造的な研究能力を持つ自立した研究者又は研究能力に加えて確かな教育開発力を備えた大学などの教員の養成を目的としています。本専攻では、幅広い問題関心のもとに、こころ系、表現系、からだ系、学び系という各系の方法および視点の多様性を学習し、自らの専門の新たな位置付けや特徴を習得します。たとえば、前期課程の共通必修科目「人間発達総合研究I」では、最先端の研究を推進している教員から、従来の枠組みでは捉えることのできない問題とそれを解きほぐすための方法論が示されるでしょう。このように、本専攻には、多面的かつ総合的に問題にアプローチする仕掛けが随所に組み込まれています。

人間発達専攻がカバーしている4つの系の専門領域



【図】人間発達専攻が包摂する専門領域

人間発達専攻では、学生自らが様々な専門領域を自由に組み合わせ、独自の視点から人間の発達を解明することを期待しています。この図は、そのための道標を示しています。

先端的研究に協働する「研究道場」の設置

人間発達専攻では、人間発達研究の特定分野において、特に優れた大学教員・研究者を養成するため、教員が共同で先端的研究を進める研究会に学生が参加し協働する体制として「研究道場」を作ります。そこでは、学生が実践的な研究力量を身につけ、研究者として早

期に自立できる素養を習得するようにします。この道場への参加は、原則として前期課程1年次又は後期課程1年次において参画意欲のある学生を募った上で、主・副指導教員の判断により決定します。

主な進路

- (こころ系)
- ・エービーシー・マート
 - ・シャープ
 - ・城西病院
 - ・阪南病院
 - ・平谷こども発達クリニック
 - ・大阪少年鑑別所
 - ・川崎市職員(心理職)
 - ・兵庫県職員
 - ・箕面市職員(心理職)

- (表現系)
- ・つぎほの甘み
 - ・トッパン・フォームズ
 - ・JALインフォテック
 - ・Miki Museo スタジオ

- (からだ系)
- ・あんしんクリニック
 - ・公益財団法人兵庫体育協会
 - ・神戸大学大学院人間発達環境学研究科(1名)

- (学び系)
- ・パソナ
 - ・西須磨幼稚園教員
 - ・日中文化産業振興
 - ・大阪市教員(小学)
 - ・明石市立高齢者大学校あかねが丘学園
 - ・神戸市教員(幼稚園)
 - ・神戸市職員
 - ・兵庫県教員(小学)
 - ・広島県教員(小学)
 - ・神戸大学大学院人間発達環境学研究科(1名)

- 博士後期課程
- ・奈良女子大学教員
 - ・和歌山県教員(高校)
 - ・東京工科大学教員

主な取得可能な資格免許

- ・幼稚園教諭専修免許状
- ・小学校教諭専修免許状
- ・中学校教諭専修免許状(保健体育、音楽、美術)
- ・高等学校教諭専修免許状(保健体育、音楽、美術)
- ・特別支援学校教諭専修免許状
- ・臨床心理士資格試験の受験資格(臨床心理学コースのみ)

心理発達に関する研究分野

「心の科学」を体系的に追究し、専門的な力量を深める

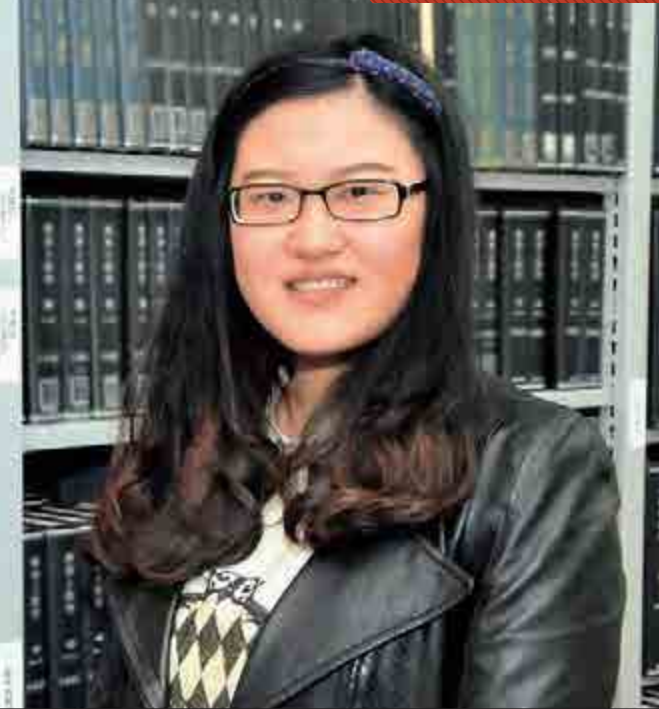
主な授業科目

- 人間発達特論Ⅰ
- 自己形成特論Ⅰ
- 教育発達心理学特論Ⅰ
- 発達障害心理学特論Ⅰ
- 発達障害臨床学特論Ⅰ
- 心理統計法特論
- 人間発達特論Ⅱ^後
- 自己形成特論Ⅱ^後
- 教育発達心理学特論Ⅱ^後
- 教育能力養成演習^後
- 臨床人間関係学特論Ⅱ^後
- 臨床心理学特論Ⅱ^後
- 芸術療法特論Ⅱ^後
- 臨床心理実習Ⅱ^後

● 後期課程開講科目



大学院生からのメッセージ



日本と中国における人物画テストの特徴の差
ー発達障害の観点からー

李 莉 さん(前期課程2年生)

子どもの心理検査法の一つである人物画テストについて、研究を行っています。人物画テストは実施が容易なので、日本では様々な発達障害に気づくための指標としても用いられることがあります。そこで、発達障害児に対する支援の意識が薄い中国において、日常生活や学習面などで困難を持つ子どものスクリーニング手段として、人物画テストの可能性を検討したいと考えています。

時代に伴う環境の変化に従って、人物画テストの結果が変わってきていることが日本の先行研究で明らかになっています。現在私は、人物画テストを用いて日本と中国の結果を比較し、相違点を明らかにし、その影響要因について文化・生活といった背景に注目しながら検討しています。

授業やゼミでは、ディスカッションが活発に行われ、他の学生の意見を聞くこともできるため、自分の考えをより深めることができます。コースの皆さんは親切でいろいろなことを教えてくれるので、楽しく充実した留学生活を送っています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

赤木 和重 准教授 後 発達障害心理学 自閉症スペクトラム障害児における 教示行為の発達と支援 自閉症スペクトラム障害児における自己と社会性の発達に注目して研究しています。特に教示行為の発達と障害について、実証的な研究を行っています。同時に、障害のある子どもどうしが教えあう・学びあう授業の構造と展開について、現場の教員と協同しながらすすめています。	林 創 准教授 後 認知発達心理学 子どもはいつ頃「目に見えない 他者の気持ち」の存在に気づくのでしょうか? 主として幼児期から児童期を対象とした認知の発達の問題に焦点をあてています。とくに「他者とかかわる心」に関心があり、社会性の認知発達に関して、実証的に研究を行っています。また、教育実践や日常生活への示唆が得られ、社会的貢献ができることを目標にして研究を進めています。
齊藤 誠一 准教授 後 発達心理学 受精から死まで人間発達の不思議と面白さをわくわくドキドキしながら研究しています ①からだとこころの関係:思春期発育がどのような心理的影響を与えるか、生殖期女性の性周期がどのような心理的意義をもつかを研究しています。②震災とこころの関係:阪神・淡路大震災や東日本大震災とりわけ放射能汚染がその人の生き方や未来にどのような影響を与えているかを研究しています。	谷 冬彦 准教授 後 人格心理学 青年期におけるアイデンティティ形成の研究とパーソナリティ (人格) 研究 青年期におけるアイデンティティ (自我同一性) 形成の研究を主に行っています。そのほか、広くパーソナリティ (人格) や自己に関する実証的研究をしています。パーソナリティ (人格) の研究としては、「甘え」や自己愛や基本的信頼感など、精神分析の人格理論に基づいた研究をしています。

主な学位論文テーマ

- ・恋愛関係における多次元的な嫉妬について
- ・思春期における問題行動の促進・抑制要因の検討:衝動性に注目して
- ・小学生に対する話し合いを取り入れた意見文指導の効果ー意見構築能力と文章作成スキルの向上を目指してー
- ・成人期における生と死に対する態度
- ・愛着との関係からみる自己愛人格の構造に関する研究
- ・青年期における親子関係及び父母関係の認知と対人態度の関連

心理発達に関する研究分野 (前期課程：臨床心理学コース)

豊富な臨床実習体験ときめ細かい指導システム

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 心理療法特論Ⅰ
- 臨床人間関係学特論Ⅰ
- 臨床心理学特論Ⅰ
- 芸術療法特論Ⅰ
- 臨床心理検査特論Ⅰ
- 臨床心理実習Ⅰ
- 精神医学特論
- 教育臨床特論
- イメージ臨床特論
- 心理療法特論Ⅱ ●
- 臨床人間関係学特論Ⅱ ●
- 臨床心理学特論Ⅱ ●
- 芸術療法特論Ⅱ ●
- 臨床心理実習Ⅱ ●



大学院生からのメッセージ



実践と研究を広く深く学べる場

篠原 有希 さん(前期課程1年生)

私は元々、発達障害のある方々の心や対人関係について関心があり、発達の視点からも研究や実践が展開されていることで有名な神戸大学の臨床心理学コースに進学しました。本研究科には、発達障害を専門とされている先生がおられ、他大学ではあまり見られない発達障害に特化した授業を受けることができます。また、臨床心理学コースには、心理教育相談室があり、先生方の丁寧なスーパーバイズを受けながら実践に臨むことができます。コース内の雰囲気はとても良く、和やかであり、先生方や先輩と親しみやすいのも魅力です。

私の研究は、「自閉症の方々がどのような顔を好むのか」についてです。具体的には、顔写真を女性的・男性的あるいは成熟的・幼若的なものへと変化させることのできるアプリを利用し、参加者の好みの顔にご自身で調整してもらうという実験課題を通して検討しています。自閉症の方々は顔に興味がないと一般的に言われています。しかし、本当はそうではなく、彼らの興味の幅の狭さが背景にあるだけではないかという問題意識を持っています。どのような研究結果が出るか、日々ワクワクしながら研究を進めています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)
(P) 2016年3月で退職予定

相澤 直樹 准教授 ● 臨床心理学, 臨床心理検査(投影法) 対人恐怖の心理を探る研究と臨床事例を中心としたロールシャッハ法研究 対人恐怖とは、人の目に映る自分の姿に強くとられる状態で、青年期に多い悩みとされています。その心理を発達の観点から解明する調査研究をしています。また、投影法心理検査として有名なロールシャッハ検査を臨床現場で用い、事例研究を中心にさまざまな心の問題に悩む人にアプローチしています。	伊藤 俊樹 准教授 ● 臨床心理学, 芸術療法 無意識から産み出されるイメージを通じて自分や他者の「心ころ」をさぐる ①心理療法の中でも、特にイメージを用いた芸術療法に関する研究。②ロールシャッハテストを用いた、芸術家の無意識の創造性に関する研究。③投影法的な手法を用いた、消費者の商品・ブランド等に対する無意識のイメージの研究。また、その知見を生かした、商品の開発・企画の研究。	河崎 佳子 教授 ● 臨床心理学, 発達臨床心理学 「心の風景」を求めて - 聴覚障害児、被虐待児への心的支援の実践的研究 聴覚障害児・者とその家族に対する心的支援をテーマに研究してきました。きこえない子どもたちの心理発達に手話が果たす役割に注目し、彼らの映像思考に関心を寄せて取り組んでいます。また、被虐待体験をもつ乳幼児への心理的ケアについて、乳児院・児童養護施設を舞台に実践研究を続けています。
森岡 正芳 教授 ● (P) 臨床心理学, 文化心理学, 臨床ナラティブアプローチ 語りが自己を形作る。その文化社会的、関係性の要因をさぐり、心理療法に活かす ナラティブアプローチによる治療の意味生成に関する研究。ナラティブや対話的自己という視点から家族関係、トラウマのケア、心身相関、病と障害、文化と癒しの問題に取り組んでいます。対話関係の中で自己が積極的に構成されるプロセスを分析しています。	吉田 圭吾 教授 ● 臨床心理学, 教育臨床心理学 教育現場における教師と心理との連携を図る一子どもや保護者のために何ができるか? 幼稚園から小中高を通して大学・大学院にまで至る教育現場における、教育相談の理論と実際、教師の教育相談の在り方、教師とスクールカウンセラーとの連携、保護者面接の仕方、発達障害や精神障害を抱える人への支援の仕方について研究しています。また最近では自死遺族相談にも力を入れています。	この5名が担当する臨床心理学コース(博士課程前期課程)は、臨床心理士受験資格取得の第Ⅰ種指定大学院コースです。

主な学位論文テーマ

- ・箱庭の継続制作での体験について 一箱庭と制作者の関係性に注目して一
- ・青年期後期・成人期発達障害支援従事者の支援継続の要因 一半構造化インタビュー調査を通して一
- ・不登校の子どもを持つ父親の想い 一子どもについての語りと父親としての自分についての語りに焦点を当てて一
- ・語り手と「私」という聴き手から生まれた病いの意味
- ・女性における「親になる」意識の形成過程 一妊娠期・育児期の多重性に着目して一



健康発達に関する研究分野

包括的かつ体系的なヘルスプロモーション研究

主な授業科目

- 健康教育学特論Ⅰ
- 健康行動科学特論Ⅰ
- 健康環境科学特論Ⅰ
- 健康増進科学特論Ⅰ
- ヘルスプロモーション特論Ⅰ
- 健康教育学特論Ⅱ^後
- 健康行動科学特論Ⅱ^後
- 健康環境科学特論Ⅱ^後
- 健康増進科学特論Ⅱ^後
- ヘルスプロモーション特論Ⅱ^後
- 教育能力養成演習^後



大学院生からのメッセージ

優れた指導者との出会いにより開かれた、世界に通用する研究者への道

小原 久未子 さん(後期課程3年生)

私が所属する中村晴信研究室では、食事と健康に関する研究をメインテーマにしています。その中で、私は女性に着目し、月経周期や月経に関連した症状と生活、食事に関する研究を疫学・実験の双方から検討しています。月経周期に伴って現れる症状は、女性にとって生活の質にも影響する重要な健康問題であるため、学部生の頃から継続的に研究しています。

私は将来、このまま研究職に就く予定ですが、そのためには世界の研究者に求められるような研究を継続することが重要になってきます。また、その際に適切な指導を受けられる指導教員に出会うことも大切だと思います。博士課程における研究がヨーロッパの雑誌に掲載されたり、日本学術振興会特別研究員(DC1)に採用されたりした時は、自分のこれまでの努力が認められたのだと思え、さらに研究を続けていく思いが強くなりました。これからも世界に通用する研究成果を出せるよう、精進する日々を歩んでいます。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

加藤 佳子 教授^後 健康教育, 健康心理学 生活科学と行動科学の学際的な立場から健康行動を解明し健康教育に貢献する 心や体の健康に関する人の行動を探り、HR-QOLとWell-beingの向上を目指しています。現在の研究課題は、健康生成モデルにもとづいた食嗜好と偏食の機序に関する研究やオーストラリアと日本のHR-QOLおよびWell-beingに関する文化比較研究、ジェンダーと健康の研究です。	川畑 徹朗 教授^後 ライフスキル教育, ヘルスプロモーション しなやかに生きる心の能力(ライフスキル)を育てる教育プログラムの開発 思春期の様々な危険行動を防止するために、ライフスキルやメディアリテラシー形成に焦点を当てたプログラムの開発研究を行っています。具体的には、メディアが喫煙、飲酒行動、ボディイメージに及ぼす影響、ライフスキル形成を基礎とするいじめ防止や性教育プログラムの開発研究に取り組んでいます。	中村 晴信 教授^後 公衆衛生学, 生理人類学 疾病予防と健康増進につながる生活習慣の探索とその生理学的メカニズムの解明 生活習慣と疾病予防や健康増進との関係について、疫学調査と実験を組み合わせ、健康問題の探索や生理学的メカニズムの解明を行っています。現在の主なテーマは、子どもの発達と体組成との関係に関する研究や、食事が生体に及ぼす影響や食行動と精神的健康との関係についての神経生理学的研究です。
古谷 真樹 講師 睡眠心理学, 生理心理学, 健康心理学 眠れない時、心や体はどうなっているのか? どうすれば、よく眠れるのか?を探索する 心身健康の維持・増進を図るために、睡眠とストレスとの関連について生理学的手法を用いた基礎的研究と教育現場や地域における実践的研究を行っています。主に就床前のストレスを低減し、円滑な入眠を導入する方法を自律神経活動から模索・実践する研究をしています。	村山 留美子 講師 環境保健学, 環境リスク学 環境からもたらされるリスクと健康の問題を考える 環境からもたらされるリスクと私たちの健康との間にある問題を、客観・主観の両面から捉え、その複合的な姿を明らかにすることを目指し、環境中の化学物質と健康影響についての実験的研究や、環境中の様々なリスクに対する私たちの認知の状況に関する調査研究を実施しています。	



主な学位論文テーマ

● は博士學位論文

- ・ワーキングメモリとライフスタイルの関連性に関する研究
- ・日本人大学生における食後の眠気に関する要因の疫学研究
- ・注意欠陥多動性障害児に対する行動療法の有効性に関する神経心理学的研究
- ・食事制限が月経随伴症状の軽減に及ぼす影響
- ・知的好奇心を育む試み:絵本の読書習慣と読み聞かせ実践の相互作用
- ・子どもの足と靴の健康教育に関する一次予防のための基礎的研究
- ・中国高校生生の性行動とその関連要因に関する文献研究
- ・中・高校生を対象とした医薬品教育プログラム開発に向けた基礎的研究[●]
- ・ライフスキル形成を基礎とする性にかかわる危険行動防止プログラムの中国への適用可能性に関する研究[●]
- ・レジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキル形成に焦点を当てたいじめ防止プログラムの開発に関する基礎的研究[●]

教育科学論に関する研究分野

教育はいかにして可能か?教育現象を探究する高度な専門能力育成

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- ☐ 西洋教育史特論Ⅰ
- ☐ 教育行政特論Ⅰ
- ☐ 教育制度特論Ⅰ
- ☐ 日本教育史特論Ⅰ
- ☐ 高等教育特論Ⅰ
- ☐ 高等教育計画特論Ⅰ
- ☐ 教育方法学特論Ⅰ
- ☐ 社会認識教育内容特論Ⅰ
- ☐ 科学教育カリキュラム特論Ⅰ
- ☐ 科学教育原理特論Ⅰ
- ☐ 西洋教育史特論Ⅱ ●
- ☐ 教育行政特論Ⅱ ●
- ☐ 教育制度特論Ⅱ ●
- ☐ 日本教育史特論Ⅱ ●
- ☐ 高等教育特論Ⅱ ●
- ☐ 高等教育計画特論Ⅱ ●
- ☐ 社会認識教育内容特論Ⅱ ●
- ☐ 科学教育カリキュラム特論Ⅱ ●
- ☐ 科学教育原理特論Ⅱ ●
- ☐ 教育方法学特論Ⅱ ●



大学院生からのメッセージ



関係性のなかで育つ「自己」、そして「研究への姿勢」

太田 知実 さん(前期課程2年生)

私は、教育制度論研究室に所属しており、青年の「自己形成」という視点から教育について考えています。理想論を語るだけで終わらず、現実には制度が運用される状況を客観視し、冷静に分析することが求められます。

また、私の所属する研究室では、先生や博士課程後期課程の先輩方と共同研究を進める場、「研究会」が設けられています。今年は、「新任教員支援」について研究しており、インタビュー調査も実施しました。あるテーマについて、一緒に研究を進めるなかで、先生や先輩方の「研究への姿勢」を身をもって学ばせていただいています。

教育科学論コースは、とてもアットホームな雰囲気です。先生方との距離が近く、学生同士の仲も良いので、充実した日々を送ることができています。

師によれば、学問とは「自他ともに、意味のあるディスコース(言説)を生み出すこと」。これからも、周りの人を大切にしながら、研究生生活を邁進してゆきたいです。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

稲垣 成哲 教授 ● 科学教育	川地 亜弥子 准教授 ● 教育方法学	勅使河原 君江 講師 美術教育
科学教育におけるテクノロジー利用についてプロジェクト型の研究を通して考える	よりよい教育実践のあり方を、子どもの生活と表現から探究する	美術を通した子どもの発達支援研究を資料研究と実践研究の両面からアプローチしています
科学教育におけるテクノロジーを利用した学習支援のための理論、方法、評価及び実践デザインについて研究しています。	子どもの発達を助成する意図的な営みとして教育をとらえ、そのよりよいあり方を探究しています。特に、戦前・戦後の生活綴方実践に注目して研究しています。近年は、系統的な教科の指導と子どもの生活と表現に根ざした指導の関係や、子どもの自由な表現を保障する指導と教育評価に焦点を当てています。	美術教育資料研究として、1940年代から1970年代に関西で出版された童詩雑誌『きりん』にみられる美術作家達による美術教育の資料研究を行っています。子どもの表現を実践的に理解する研究としては、対話型美術鑑賞をベースとした美術教育実践研究を行っています。
船寄 俊雄 教授 ● 日本教育史、教育学	山口 悦司 准教授 ● 科学教育	山下 晃一 准教授 ● 教育制度論
教育の歴史を知り、明日の教育を拓く——日本教員養成史を中心に	科学の学びをよりよく支援するための理論的・実践的な研究に取り組んでいます	「なぜ学校に行くのか」不透明な時代に、いかにして「通いたい学校」を実現できるか
明治時代以降現在に至る教員の養成史を研究しています。その中でも最も関心をもっているのは、戦前にあった中等教員の国家検定試験(文検)の研究です。	教育学の中でも、科学(理科を含む)の教育に特化した専門分野で研究しています。最近では、子どもの学習だけではなく教師の教えることに関する学習も支援しうる「教師用指導書」の研究、長期にわたる子どもの概念変化や思考発達を扱う「ラーニング・プログレッションズ」の研究に取り組んでいます。	「なぜ学校に通わなければならないのか」という苦悩が少しでも減り、子どもが通いたくなる、大人も勤めたく・関わりたくなる学校をどう創るか。地域が学校や教師を評価・承認する制度や、教師が互いに支えあい、子どもや保護者への感受性を発揮できる校内組織などのあり方について研究しています。
吉永 潤 准教授 ● 社会認識教育論	渡部 昭男 教授 ● 教育行政学(地域教育学、特別ニーズ教育)	渡邊 隆信 教授 ● 西洋教育史、教育哲学
社会科教育は、政治、国家、権力作用、そして戦争をどう教えるべきか?	人権と幸福を享受できるよう教育法制度を運用する智恵&工夫を学ぶのが教育行政学です	「新教育」の思想と実践に、今日教育課題解決の糸口を探る
社会認識とは何か。それは、つきつめれば、人間がどうすれば共存しうるかという問いへの各自の答えの構築だと考えています。あなたならどう答えますか?	特別ニーズのある子どもたちを含む、人間発達と地域創造を保障できるような教育行政の在り方、特に住民と身近な基礎自治体(市町村)の可能性を探っています。近年は、「糸賀一雄の思想」「発達権の保障」「漸進的な無償化」「インクルーシブ教育への道」を探究しています(附属図書館Kernelのサイトで検索閲覧可能)。	これまで主に、オーデンヴァルト校を中心とした「新教育」の思想と実践の研究と、精神科学的教育学派を中心としたドイツ教育学説史研究に取り組んできました。その際、特に関心があるのは「共同体」と「責任」の概念です。近年は、日本とドイツの教師教育改革にも研究関心を広げています。



主な学位論文テーマ

● 博士學位論文

- ・学校組織における「協同的な学習」を成立させる組織的要因
—PLC実践における学校変革プロセスを手がかりに—
- ・中国の都市部と農村部における小学校教師の学習指導観の比較
- ・科学的な問いの生成を支援する授業のデザイン研究
- ・発達障がい青年の移行支援—「専攻科」に着目して—
- ・マルセル・モースの人類学における贈与交換と教育
—〈生〉の形式の社会的伝承 ●

子ども発達に関する研究分野

乳幼児から青年期の子どもを対象に、子どもの教育と発達を総合的に学びます

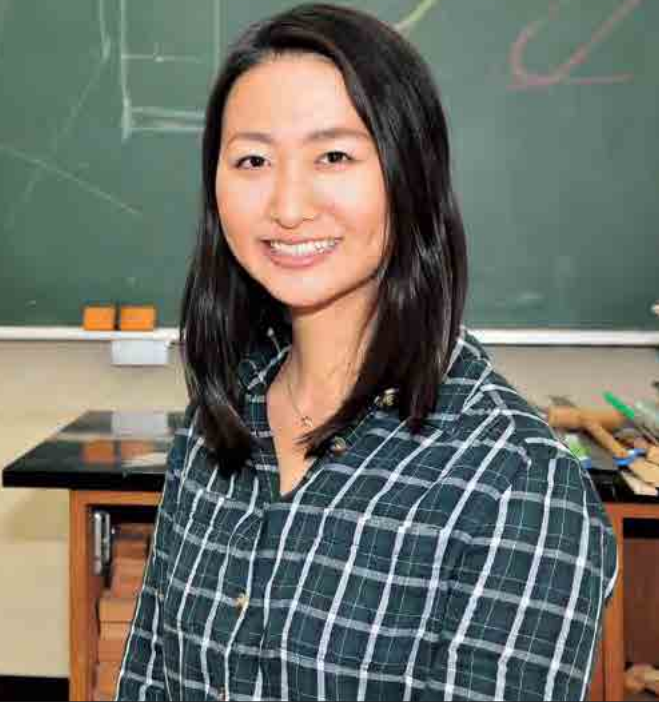
主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 乳幼児発達特論Ⅰ
- 乳幼児教育保育特論Ⅰ
- 数理認識発達特論Ⅰ
- 造形表現学習特論Ⅰ
- 幼年音楽表現特論Ⅰ
- 児童造形表現特論Ⅰ
- 児童文学表現特論Ⅰ
- 身体運動発達特論Ⅰ
- 乳幼児発達特論Ⅱ
- 乳幼児教育保育特論Ⅱ
- 造形表現学習特論Ⅱ
- 幼年音楽表現特論Ⅱ
- 身体運動発達特論Ⅱ



大学院生からのメッセージ



歴史の中に隠れている
人間の知恵を見つける

木村 あかね さん(前期課程1年生)

私は現在、表現教育に関する研究をしています。先生の勧めでハンザ同盟に関する文献も読んでいます。初めは、表現教育とハンザ同盟がどう関係するのか分かりませんでしたが、「人間の知恵」がそれらを築いてきたという重要な共通点があることに気づきました。他方現代の表現教育は、表現教育に関わる人々が、その時代が抱えた課題を乗り越えようと試行錯誤する中で作り上げられてきました。また、ハンザ同盟は巨大な都市連合体として知られていますが、ハンザが強力な都市連合になる前の主役は都市ではなくて商人たちであって、彼らが商業圏を広げようとして結束を固めて行く中でハンザが形成されました。人々がより理想的なものを作ろうとしてどのような知恵をもって行ってきたのか、それを発見する時、私は人間の持っている潜在能力の大きさに驚かされます。過去の歴史から人間の知恵を発掘しながら、これからの日本に役立つ研究をしていきたいです。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

岡部 恭幸 准教授 後 数理認識論, 数学教育 算数・数学についての子どもの「わかり」を解き明かし、「わかる」授業をつくる よりよい算数・数学教育が実践されるために、子どもがどのようにそれぞれの数学概念を認識していくか、またそれぞれの数学概念がどのような構造を持っているかについて研究しています。そして、それらの研究で得られた知見に基づいて教育内容や方法の開発を実践的に行っています。	北野 幸子 准教授 後 乳幼児教育学, 保育学 乳幼児の特性を理解し尊重し発達に適した乳幼児教育と保育者の専門性を探求する 乳幼児(0~8歳くらい)を対象とし、その発達に適した保育の内容や方法、保育に独自の専門性、保育者の専門要件、養成教育や研修の在り方について研究しています。また、国内外の専門組織の活動や政策を検討し、乳幼児教育保育領域の専門性の確立や、維持向上を図るシステムについて探求しています。	木下 孝司 教授 後 発達心理学 子どもの「不思議」を通して、人間の発達の「謎」に迫る 乳幼児や障害のある子どもの発達について、次のようなテーマで発達心理学的な研究を行っています。1)乳幼児が相互に相手の心の状態を理解するプロセス。2)子どもが他者とのコミュニケーションを経て自己を形成していくプロセス。3)保育や療育を通じた発達支援のあり方と発達保障の基盤づくり。
國土 将平 教授 後 身体発達発達, 保健体育科教育, 健康・スポーツ測定 子どものからだの発達・運動能力の発達・健康・生活を計量的に切り取り解明する 日本やアジアの子どものからだの発達や健康、体力・運動能力・運動動作の発達を計量的に明らかにし、これらの相互作用を検証するとともに、教育・学習活動、生活環境や生活習慣の影響について研究しています。統計を駆使して複雑な現象を説明しますが、人間の感覚に近い観点や結果を目指しています。	五味 克久 教授 後 幼年音楽, リトミック, 合唱指揮 リトミック及び幼年音楽をどのような課題でどのように指導するか 生活の中にある音や音楽に気づくことから始めます。そして、身近にある物で簡単に音のでもものを作ってみます。音の発見あるいは音の気づき、ということから考えています。このようなことからどのように音楽教育や音楽の活動に繋げていくかという研究をしています。	鈴木 幹雄 教授 後 図工・美術教育学, 芸術教育に関連した教育学 子どもの心に語りかける表現教育、その営みと努力 ヨーロッパの芸術教育学に関心があります。この点で、ナチズム期亡命者達によりアメリカにもたらされたヨーロッパの学問に関心があります。
目黒 強 准教授 後 児童文学, 国語教育 児童文学作品を通して、子どもという存在に価値を見出す社会について考える 明治以降、特定の子どもの観が学校・家庭・社会のそれぞれの領域で発見され、相互に関連しながら、近代的孩子観を形作ってきました。このようなムーブメントのなかで、児童文学の文学場がどのようにして成立したのかについて、歴史社会的観点から明らかにしようと試みています。		

主な学位論文テーマ

- ・割合概念の獲得にみられるつまずきとスキーマ形成の関連
- ・時間的広がりをもった感情理解の発達
- ・幼児期の絵における意図の発達 ―意味づけによる意図の持続の検討―
- ・自閉症の幼児における笑いと発達 ―通園施設での観察事例の分析―
- ・2歳児における葛藤場面での自己調整の発達
- ・関数描画ソフトを利用した数学教育について
- ・高機能自閉症児の自己認知と自尊心を育む教育的支援 ―「9,10歳の節」での自己認知の質的变化に着目して―
- ・1960年代イギリスにおけるデザイン教育コンセプトとその教育学的視点 ―イングランドのデザイン教育者達の学問的課題意識を事例に―
- ・幼児期の科学教育 ―科学絵本の読み聞かせを中心に―
- ・5歳児の好きな遊びにおける基本的動作の定義とその発現
- ・小学校学校図書館における学校司書の業務の現状と課題

発達支援に関する研究分野

現場の実践者と協働した実践的研究を行う

主な授業科目

④ 後期課程開講科目

- 生涯学習支援特論Ⅰ
- エンパワメント支援特論Ⅰ
- 児童発達支援特論Ⅰ
- 子ども・家庭支援論
- 労働・成人教育支援論
- ヘルスプロモーション論
- ボランティア社会・学習支援論
- ジェンダー研究・学習支援論
- 障害共生支援論
- 発達支援技術論
- 生涯学習支援特論Ⅱ ④
- エンパワメント支援特論Ⅱ ④
- 児童発達支援特論Ⅱ ④



1年制履修コース

人間発達専攻には、1年間で修士号を取得することのできるコースがあります。この1年制履修コースは、職業人として高い成果を積み重ねてきた社会人を対象としたコースです。このコースの学生は、発達支援に関する研究分野の教員の支援を受けて、アクションリサーチに取り組み、実践に即した研究能力を高めます。また、自分自身の職業経験に基づいて論文にまとめ上げることで、さらに高度に専門的な職業人としての能力を獲得することをめざしています。

1年制履修コースで学ぶ学生は、経験豊富な学校教員、保育士、地方公務員、ソーシャルワーカー、企業経営者、大学職員、カウンセラーなど、さまざまな領域で職業経験の実績を積んだ人々です。

大学院生からのメッセージ



実践に結びついた研究の楽しさ

盛 敏 さん(後期課程3年生)

自閉症児の社会性の発達において、異文化をもつ支援者が関わる意味について研究しています。私は日本に来てから自閉症児支援の現場で活動に参加するようになったのですが、最初は外国人である私に何ができるのだろうか戸惑いを感じていました。しかし、自閉症の子どもとの関わりを深めるにつれ、中国文化を背景にもつ私の立ち位置と日本社会における自閉症の立ち位置との類似性に気づきました。私が大事にしている価値と研究を結びつけることができ、幸せを感じることができました。

もともと私は、現場に足を運んで自分の肌で感じるのが大好きです。ですから、私にとっての研究の魅力は、現場で自分が感じた驚きと疑問をベースにして、先行文献や勉強会や発表会などを通して自分なりの答えを導き出すところにあります。ときどき自分の能力の限界を感じることがありますが、いろんな人の力を借りて苦しさを乗り越えた後の喜びは大きいものです。

スタッフと研究分野・研究テーマ

④ 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

伊藤 篤 教授 ④	津田 英二 准教授 ④	松岡 広路 教授 ④
子ども家庭福祉論	生涯学習論, 障害共生支援論	生涯学習論, 福祉教育・ボランティア学習論
拠点を核とした最早期からの育児支援システムを構築し,その効果について検討します	「障害」を主テーマにしながら,インクルーシブな社会形成の実践課程を追求します	「持続可能な社会」の創成プロセスにおける学びの様態を実践的・理論的に探究します
地域における子育て支援の質を高めるための支援構造を, 家庭のライフサイクル・被支援者のニーズやリスクの水準・支援主体間の協働・センターモデルなどから検討します。	障害に関する社会的課題を切り口として, インクルーシブな社会に向かう人々の学びの方法や過程を追究する実践的研究を行っています。	ESD推進の原理・システムを, 生涯学習論および福祉教育・ボランティア学習論の観点から考究し, ポスト近代教育の枠組みの構築を目指しています。

2015年度中に新しい教員が加わる予定です。



主な学位論文テーマ

④ は博士学位論文

- ・障害児の発達を促す環境形成に向けた地域資源の相互連携
- ・子育て支援としての親子リズム教室の意義と可能性
- ・大学を基盤とした福祉教育実践における学習者の変容プロセスに関する一考察
- ・共感的自己肯定感を育むインクルーシブ教育に向けて
- ・ひとり親家庭の母の自己形成からみる就労支援のあり方
- ・病院ボランティア活動に内在するインフォーマルな福祉教育に関する研究 ④
- ・介護福祉士のディスエンパワメント状況克服の過程
- ・リスク社会における防災教育の在り方
- ・「共に働く」現場の葛藤—障害学の視点から—
- ・精神保健福祉分野で働く女性援助職の自己決定



身体行動に関する研究分野

人間の行動・スポーツを科学するチームです！

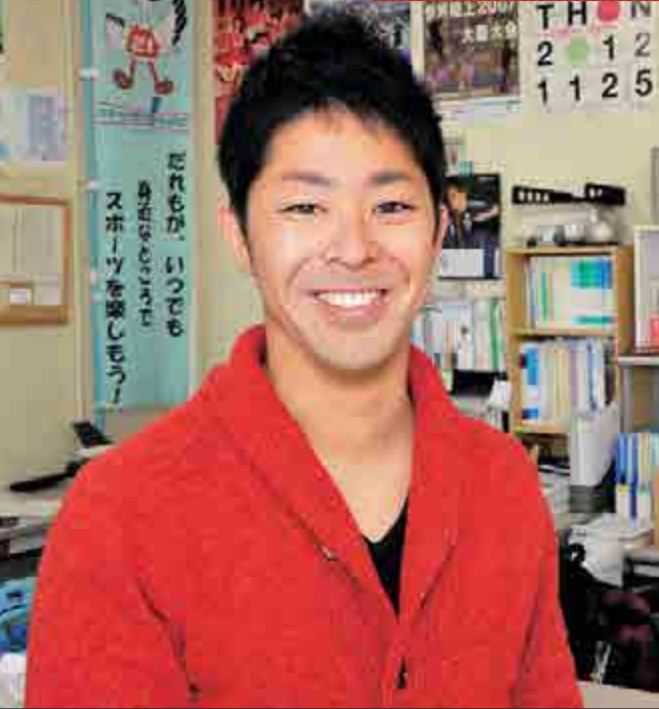
主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 身体運動処方特論Ⅰ
- 運動心理学特論Ⅰ
- 身体運動制御特論Ⅰ
- 身体システム特論Ⅰ
- スポーツバイオメカニクス特論
- 生涯スポーツ特論Ⅰ
- 身体コンディショニング特論
- スポーツ文化史特論
- 身体運動処方特論Ⅱ ●
- 運動心理学特論Ⅱ ●
- 身体運動制御特論Ⅱ ●
- 身体システム特論Ⅱ ●
- 身体運動技術特論 ●
- 生涯スポーツ特論Ⅱ ●
- スポーツ文化史特論Ⅱ ●



大学院生からのメッセージ



すべての人がスポーツのやりがいを感じられる社会を目指して

高松 祥平 さん(後期課程2年生)

私が所属する生涯スポーツ研究室では、毎年、神戸マラソンのランナー調査やツール・ド・おきなわの参加者・観戦者調査を行っています。また、調査を行うだけでなく、自らマラソンやサイクリングに挑戦し、生涯スポーツを実践しています。

私の研究テーマは、スポーツ指導者のコンピテンシーです。コンピテンシーとは「効果的あるいは優れた成果と関連する個人の基本的な特性」と定義されます。この概念を用いて、平成26年度においては高校野球の監督のコンピテンシーが、選手の動機づけにどのような影響を及ぼすのかを研究しています。今日、勝利至上主義、苦役主義から生まれるスポーツ指導者の様々な問題が明るみになっています。それが原因でスポーツから離れる選手がいることは残念なことです。すべてのスポーツ指導者と選手が互いに成長し、スポーツのよさを実感できる指導者育成システムの確立に向けて、一つ一つ研究を積み重ねていきたいと思っています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

秋元 忍 准教授 ● 体育・スポーツ史 近代社会におけるスポーツ文化の特質を、歴史学の方法に基づき解明します 19世紀末から20世紀初頭の英国を対象として、近代社会におけるスポーツ文化の特質を、歴史学の方法に基づき解明します。統括組織設立以前のゲームの組織化とルールの一化の経緯、統括組織のゲーム普及戦略、統括組織非加盟クラブの活動、スポーツ用具業者の役割などを主要検討課題としています。	河辺 章子 教授 ● 運動生理学(身体運動制御) 身体運動の巧みさを探る ヒトの身体運動の制御機構を探索し、随意動作の巧みさを探るとともに、巧みな動作の獲得過程を解明し、最終的には子どもから高齢者まで様々なレベルのスキル向上に貢献すること、そしてより適切な効率のよい練習法や指導法の開発への貢献を目指しています。	木村 哲也 准教授 ● 身体システム学 様々な対象者の運動に役立てることを目標とした研究を進めます 立位バランス制御など、ヒトの運動制御システムにおける感覚入力と運動出力の統合メカニズム解明に向けた基礎的研究から、運動補助器具の開発などの応用研究まで幅広く研究を行っています。生理学、バイオメカニクス、生体工学の各手法を用いています。
高田 義弘 准教授 運動生理学(身体コンディショニング) 運動、スポーツ活動を通じて、健康と競技力向上を目指します!! 運動・スポーツ(トレーニング)することによって疾病を予防することが出来るのか?競技力向上・障害予防のためのトレーニングとはどのような方法が最適なのか?運動による身体コンディションやパフォーマンスへの影響について研究しています。	高見 和至 准教授 ● 運動心理学 意識的に思考した行動から、無意識に遂行される行動へ、人間の行動が習慣化する不思議 現在の研究テーマは、「運動習慣の心理的プロセス」です。人間行動の発現から定着という習慣化を生み出す心理的プロセスを、運動行動から解明しています。運動・スポーツの場合、習慣化の強さは、行動ルーティンの有無、環境刺激による動機づけ、7非遂行時の否定的感情生起などから推測できそうです。	前田 正登 教授 ● スポーツ技術論, スポーツバイオメカニクス, スポーツ工学 スポーツの用器具を使いこなすために——動作研究と用具研究の交点 人間の動きや運動技術を考慮に入れたスポーツ用具とは?スポーツの動作・技術研究と用具研究を融合し、それら相互間の影響までを含めた研究は、スポーツで勝つために、あるいはスポーツをより楽しいものにするには不可欠です。選手が使いこなせる、人の動きにマッチしたスポーツ用具を考えていきます。
山口 泰雄 教授 ● スポーツ社会学, 生涯スポーツ論 国内外のスポーツ振興やスポーツ政策の現状と課題を社会科学の手法により解明します スポーツ社会科学の理論と手法により、スポーツ参与、スポーツ政策、スポーツツーリズム、国際比較研究等に取り組んでいます。特に、スポーツ・フォー・オール(生涯スポーツ)の推進に貢献できる応用研究に焦点を当て、フィールドワークを中心に進め、国内や海外の学会・コンgresで情報発信しています。	 	

主な学位論文テーマ

● は博士学位論文

- ・60秒間の激運動による疲労からの回復過程に関する研究—休憩時間とパフォーマンス回復の視点から—
- ・野球選手の投球における主観的努力度がボール挙動に及ぼす影響
- ・足踏み運動におけるプリファードテンポに関する研究—外乱による影響を中心に—
- ・総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究
- ・縄跳び運動が子どもの注意力・集中力に及ぼす影響
- ・主観的努力度が疾走動作の左右差に及ぼす影響
- ・筋力発揮による反応時間からみた内的準備状態に関する研究
- ・指定管理者制度が導入された公共スポーツ施設のサービス・クオリティに関する研究 ●
- ・短距離走クラウチングスタートにおけるスターティングブロックへの力発揮からみたブロッククリアランス動作に関する研究 ●

行動発達に関する研究分野

行動の発達・適応を多角的に究明する分析力と問題解決能力を磨く

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- エイジング特論Ⅰ
- スポーツジェロントロジー特論Ⅰ
- 身体機能加齢特論Ⅰ
- 身体機能調節特論Ⅰ
- 行動適応特論Ⅰ
- エイジング特論Ⅱ●
- スポーツジェロントロジー特論Ⅱ●
- 身体機能加齢特論Ⅱ●
- 身体機能調節特論Ⅱ●



大学院生からのメッセージ



研究を通して自分が成長できる環境

白本 愛 さん(前期課程2年生)

私は学部時代に水泳をしており、水泳時の生体反応やパフォーマンスとの関係に興味を持っていました。水泳を含む多くのスポーツは、一般的に全身を使っていますが、運動中の生体反応を観察した先行研究では自転車運動(主に脚のみの運動)が用いられてきました。そこで私は現在、上肢、下肢の両方を用いた全身運動中の生体反応について体温調節システム(主に発汗や皮膚血流反応)を中心に研究しています。研究を進める上で重要な実験環境や、疑問があればすぐに質問できる環境が整っていることは本研究科の魅力の一つだと思います。私の目標は、自分の研究を海外の雑誌に投稿することです。簡単なことではありませんが、またとない機会なので挑戦したいと思っています。

本研究科には様々なことに挑戦する機会があります。積極的な姿勢で取り組み、サポートしてくださる先生方もいます。ぜひこのコースで、一緒に充実した大学院生活を送りましょう!

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

岡田 修一 教授 ● 加齢の身体運動科学 転倒予防の戦略と「七転び八起き」の大切さを学ぶ 超高齢社会にある我が国において、高齢者の健康に関わる大きな問題として、加齢に伴う転倒の増加があげられます。私の研究室では、身体運動科学的手法を用いて、転倒予防を視野に入れた高齢者の生活・運動機能の解析とその能力向上に関する研究、ならびにそれらの知見をもとにした介入研究を行っています。	片桐 恵子 准教授 ● 社会老年学, 社会心理学 豊かな高齢社会の実現を高齢者自身と社会の視点から考える 世界一の長寿国となった日本においても、高齢者が幸せに生きる社会の実現にはさまざまな課題があります。そのような社会的な課題や、高齢者自身の抱える問題について、質問紙やインタビュー調査という量的手法と質的手法を組み合わせたミックスメソッドという手法を用いて、広く深く探究することを目指しています。	近藤 徳彦 教授 ● 応用生理学, 運動生理学, 環境生理学 統合的に調節されている汗の仕組みを知ることで人の行動を理解する 人は運動や環境変化に対してからだの様々な生理学的機構を統合することで適応しています。運動、年齢、性差、日内変動、運動トレーニング、人種差などを対象に、この統合的な仕組みを研究しています。また、その一つである人の汗の不思議を探ることで、人の行動の探求も行っています。
長ヶ原 誠 教授 ● スポーツプロモーション, 健康行動科学, ジェロントロジー 生活と社会の活性化を目指したスポーツ・健康増進活動の支援方法を探求 成人・中高齢者を対象とした健康増進やスポーツプロモーションの理論・実証的研究と共に、これらのイベント開発、啓発キャンペーン事業、組織開発・運営、等のプロジェクト事業を通じたアクションリサーチを行い、個々の生活と社会のアクティベーション(活性化)の可能性と支援方法を探求しています。	増本 康平 准教授 ● 高齢者心理学, 実験心理学, 認知心理学 超高齢化社会のさまざまな問題を心理学的側面から科学的に捉える 現在、加齢が人に及ぼす影響やそのメカニズムに対する関心が、医療・福祉・介護に限らず、さまざまな分野で高まっています。私の研究室では、豊かな高齢社会を実現するための環境・技術の構築を目指し、加齢による認知機能・行動要因の変化について実験心理学的手法を用いた研究を実施しています。	



主な学位論文テーマ

● は博士学位論文

- ・ 空巢高齢者のサクセスフル・エイジング
- ・ 運動トレーニングの違いがヒトの熱放散反応に及ぼす影響
- ・ 成人・中高齢者の主観年齢に影響を及ぼす要因の分析
一体力年齢とスポーツ活動の関連性に注目してー
- ・ 四川大地震極重被災地什 市紅白鎮地域の
高齢者の生活回復過程に関する研究 ー震災3年後調査に基づいてー
- ・ 人工膝関節置換術施行患者における転倒リスクの経時的・多角的検討
- ・ 二重課題を伴った高齢者の動的立位姿勢調整能 ●

表現創造に関する研究分野

芸術と生活と人生を新たな視点で統合することを目指します

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 現代彫刻特論
- 声楽表現特論
- 器楽表現特論Ⅰ
- 現代絵画特論Ⅰ
- 音楽創造特論
- 音楽創造研究特論Ⅰ
- 音楽療法持論Ⅰ
- 舞踊表現特論Ⅰ
- 立体造形演習Ⅱ ●
- 声楽表現演習 ●
- 器楽表現持論Ⅱ ●
- 現代絵画持論Ⅱ ●
- 音楽創造研究持論Ⅱ ●
- 音楽療法持論Ⅱ ●



大学院生からのメッセージ



制作を通して、作品研究の
手がかりを得る

田中 美佳 さん(後期課程3年生)

私は、以前より美術教育の範疇外にある作品に関心があり、それらの独創性についてより深く理解したいと考え、大学院に進学しました。現在は岸本吉弘先生のもとで、近年国内においても認知度が高い「アール・ブリュット」という美術教育を受けていない人々が描く作品の創造性をテーマに、自身の制作を進めながら、作品研究を主体として論文の執筆に取り組んでいます。

関連資料を読み込むことや研究対象となる作品を鑑賞すること以外に、実際に制作ができる環境にあることは、作品における素材やモチーフ、画面構成やテーマについて再考することにもつながり、研究に欠かせない方法のひとつです。また、自身の制作においても手法を再認識する機会につながっています。両者を並行して進めることは大変ではありますが、博士後期課程であるからこそ、時間をかけてできる研究だと思っています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

岡崎 香奈 准教授 ● 音楽療法, 即興演奏 人間は音・音楽を通して何を表現するのか—音楽療法における即興の役割を探索 医療, 福祉, 教育現場における音楽の臨床的活用について研究しています。これまで認知症, 失語症, 障害児・者, 不登校児等の治療に携わってきました。現在は, 障害や疾病の有無に関わらず「表現者としての人間」が音楽を即興する行為と, そのプロセスで生起する要素を検証しています。	岸本 吉弘 准教授 ● 絵画表現 直観と継承。絵画自身の自律性, 重要性を現代社会に問える制作と研究 主に近代以降の絵画表現を造形的な視点より分析し, それらを継承する形で現代美術や場合によっては現代社会をも俯瞰するものの, 残念ながらそうした文脈下には「真のクリエイティビティ」は存在しない。それらに対象化される「自己≒日本≒人間」という存在を(理屈ではなく)見詰めています。	佐々木 倫子 教授 ● 声楽 身体が楽器である歌。身体を通して感じそして考えたことを研究テーマにしてみませんか 歌曲における朗唱法に関する研究。歌曲演奏において「語ること」と「うたうこと」の差異を心理的側面, 技術的側面などから明確にしつつ, その表現法を研究し, コンサート活動という実践に繋げています。演奏はロシア・ドイツ・日本の歌曲が中心ですが, とくにロシア歌曲は私のライフワークです。
関 典子 准教授 ● 舞踊学, コンテンポラリーダンスの創作と研究 身体・空間・時間を媒体に, 瞬間の共有を目指すコンテンポラリーダンスの世界 有限の身体や動きという儚いものを媒体とする芸術, 舞踊。その「瞬間性・現在性」にこだわり, 表現・研究活動をフィードバックしながら探究しています。近年, 指導学生がArtistic Movement in Toyama松本千代栄賞(最高賞)等を受賞。身体のもつ力を信じる同志として, 舞踊や身体表現の魅力を探究し続けます。	塚脇 淳教授 ● 美術, 彫刻 More is Bore! 過剰であることはたやすい。そして退屈だ! 今私は敢えて主張する。Less is More! と 私たちは西洋から何を学び何を受け入れ何を自分たちのものとしてきたのか, 20世紀美術を代表する作家や表現を様々な角度から考察・検証し, 「彫刻」を思考しています。近年はロシアとの芸術交流に力を入れています。それはロシアが構成主義を生んだ国であり, 私の作る彫刻にはその構成主義の精神が脈々として存在すると感じるからです。	田村 文生 准教授 ● 作曲, 編曲, 西洋芸術音楽を中心とした作品研究 文化的パースペクティブとスペクトラムの中にある「音」を, 書く, 聴く, 読む 「音」という概念には, 素材, 空間, 技術, 美意識など, 様々な要素との接点が認められます。それらとの距離を測りつつ作品の創造に取り組むと同時に, 「作品」として提示された価値の読み方・語り方について, 個々の作品, 諸芸術の動向・理論の中に手掛かりを求めつつ, 探索しています。
坂東 肇 教授 ● 器楽(ピアノ, 室内楽) 魅力ある演奏の秘密, 自由自在の境地と自他一如の世界を求めて 演奏は生命の響きそのものであり, 人間のすべてを映し出すものです。誰の演奏にも, その人生が如実に反映されています。歴史的な名演奏家の演奏が, どのように確立され円熟してゆくのかといった研究を通して, 人間の個性や人格の発達と, その演奏との相関について探究しています。		

主な学位論文テーマ

● は博士学位論文

- ・ F.リストのバラード第2番のルーツ及び演奏解釈についての考察
- ・ コミュニティダンス・高齢者プログラムの実践
- ・ ポピュラー音楽の学校音楽化に伴う諸問題と受容のアリアリティに関する考察
- ・ パウル・クレーのポリフォニー絵画における「造形思考」
- ・ 図形楽譜を使用した子どもとの創造的音楽活動—音楽療法の視点を通して
- ・ 歌唱伴奏のピアノズム—合唱におけるピアノ伴奏の検証を通して
- ・ 音楽療法におけるソングライティング—その情動のヴィークルとしての性格をめぐる
- ・ 武満徹作品における音楽語法の変遷—モチーフSEAを中心に ●



表現文化に関する研究分野

文化としての表現を、多面的に深く追究する

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 図形科学特論Ⅰ
- 建築文化史特論Ⅰ
- メディア情報社会特論Ⅰ
- ファッション文化特論
- 音楽民族学特論
- 音楽文化史特論Ⅰ
- 視覚情報表現心理学特論Ⅰ
- 図形科学特論Ⅱ ●
- 建築文化史特論Ⅱ ●
- メディア情報社会特論Ⅱ ●
- ファッション文化特論Ⅱ ●
- 音楽民族学特論Ⅱ ●
- 音楽文化史特論Ⅱ ●



大学院生からのメッセージ

実践と理論の両面から、人の交流と芸術の可能性を考える

内林 加奈 さん(前期課程2年生)

私は幼少期にピアノを始め、大学では学科における実習、研究会、インターンシップなどを通じて、出演者としてのみならず企画・構成の立場も経験してきました。こうした経験から、芸術を通じた人びとの交流を探索したいと考えて大学院に進学しました。

舞台公演というと着飾って行くようなものを連想しがちですが、実際には気軽に立ち寄れるものも多くあります。そのようななかで、私が注目しているのは「地域芸術祭」です。これは参加時の敷居が低く、人びとの交流の機会として大きな可能性を感じます。その可能性を、理論と実践の両面から検討することが、私の研究テーマです。

課外活動では、学部英会話ルームに継続して通い国際交流と英語学習を行っています。夏休みには海外インターンシップとして、文化紹介イベントの企画・運営の研修にも参加しました。研究をはじめ様々な活動を通して出会う人びとから日々たくさんの刺激を受け、学んでいます。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

梅宮 弘光 教授 ● 近代建築史・都市史 建築や都市を舞台に展開する人と世界の相互関係に時代の特徴を探る 人間と世界の相互関係を表現や象徴を切り口に探求することを、表現文化研究と捉えています。なかでも建築や都市といった空間的拡がりをもった世界を対象に、近代という時代の特徴を探ろうとしてきました。具体的には、日本の建築におけるモダニズム思想の生成と変容、戦後神戸の都市環境形成史などです。	大田 美佐子 准教授 ● 音楽史、音楽美学 音楽はどこにあるのか?うつろいゆく音楽のメッセージを歴史の多層性のなかに読み取る 近現代を中心に、音楽作品やその受容に表象された時代精神を読み解く作業をしています。様々な芸術領域と交流をもつ音楽作品のなかで、個人あるいは集団として、「伝統」がどのように受容、展開され、現代の作品や文化にどのようなインパクトを与えているのかを、歴史研究と音楽批評の両面から考察しています。	小高 直樹 教授 ● 感性科学、図形科学 あいまいで多義的な感性の世界に切り込む—感性情報処理科学の挑戦 感性科学の分野においては、芸術などの創造的表現におけるあいまいで多義的な感性情報を工学的に取り扱うことができる方法を構築すること、また図形科学の分野においては、平行軸測図法と透視図法を、一つの演繹体系のもとに統一的に扱うことのできる理論を構築することを目指しています。
谷 正人 准教授 ● 民族音楽学・異文化理解教育 イラン音楽の「即興」概念の解明、および音楽教授法とそれを支える価値観の変遷の研究 イラン音楽を題材に、「即興」「伝統」「オリジナリティ」などの諸概念を研究しています。最近ではイラン国外に亡命した音楽家達も対象に、イラン音楽の教授法の変遷 やヴァリエーションを、近代教育の知識観・教育観といわゆる徒弟制のそれとのダイナミクスとして比較する研究をしています。	田畑 暁生 准教授 ● 社会情報学、映像論 多種多様なメディアのあふれる現代の現代の情報社会について考え、行動する 現代の情報社会に関する理論的・実践的な諸問題を研究対象に対し、社会学および学際的な手法でアプローチしています。より具体的に言うと、情報社会論および監視社会論の思想的系譜や、映画やテレビでの映像作品の内容分析、各地で行われている地域情報化政策の効果や影響などを扱っています。	野中 哲士 准教授 ● 認知科学、生態心理学 環境とふるまいの出会いに生まれるダイナミックな秩序を見つめる 「表現」は環境との接点に生じるダイナミックな活動です。「環境との出会い」をキーワードに、胎内から出て地上環境と出会う乳児の発達、環境との関係を新たに築くりハビリ、職人のわざや芸術家の試みなど、豊かな環境と柔らかなふるまいの出会いに起こる出来事の凄みに触れてみたいと思っています。
平芳 裕子 准教授 ● ファッション文化論、表象文化論 服は語られることでファッションとなる／そしてそれはいかに語られてきたか ファッションという領域横断的な対象に対して、現代への批評的まなざしと歴史のプロセスの解明との両輪でアプローチします。特に近現代の雑誌メディアにおける身体イメージと言説の分析を通じて、文化的枠組としてのファッションの成立過程やファッションシステムの構造と機能について研究しています。		

主な学位論文テーマ

● は博士学位論文

- ・若者の音楽行動とメディア—テン年代のインターネット社会における事例を参考に
- ・中国における日本アニメブームに関する考察—声優ファンサークルの成立と活動を中心に
- ・日本語拍における音象徴のメカニズムとその特性—視覚・聴覚・身体感覚の関係性
- ・バリ島の民俗芸能「ジェゴグ」に関する研究
- ・音楽芸術と視覚芸術の交感—エリック・サティとダダイズム
- ・神戸市の震災復興過程における都市環境の変容に関する研究 ●
- ・近代中国における商業印刷物「月扮牌」に関する基礎的研究 ●
- ・ボールルームダンスの魅力に関する研究—踊り手の属性との関連性を軸にして ●



人間環境学専攻

人間発達を支える新たな環境の創造と持続を目指して

専攻の理念

人間の発達を促し、支え、助けるために、どのような環境を、どのように構築し、維持すればよいのか。人間環境学専攻は、この問題の解明に向けた教育と研究に取り組んでいます。博士前期課程が目的とするのは、豊富な専門知識とそれを応用する能力、そして実践行動力を有し、人間環境のいっそうの改善のために活躍できる多様な人材の育成です。博士後期課程は、人間環境に関する高度な専門学識と創造的な研究能力を備える自立した研究者、または研究能力に加えて実践的な教育開発能力をもつ大学教員などの養成を目的としています。



専攻長からのメッセージ

専攻長 平山 洋介 教授

人間環境学専攻は、人間の発達を促し、支え、助けるために、どのような環境を、どのように形成し、維持すればよいのか、という問いを立て、その解明に取り組んでいます。この課題に立ち向かうには、多様な分野からのアプローチが必要です。このため、本専攻では、人間環境としての自然を対象とし、その成り立ちを解明しようとする「自然環境論」、数理科学を基礎にして情報環境を研究対象とする「数理情報環境論」、日常生活の状況から環境のあり方を追求する「生活環境論」、社会環境に関する諸矛盾の克服を目指す「社会環境論」という四つの履修コース(前期課程)・教育研究分野(後期課程)を設けています。これに加え、後期課程には、環境先端科学講座があります。前期課程では、専門的な知識に加え、実践的な行動力をもち、政府、自治体、民間企業、NPOなどの多様な領域で活躍できる人材を養成し、後期課程では、高度な専門学識と創造性を備える研究者、大学教員などを養成します。

コースと教育研究分野

自然科学の広い視野を備えて環境の本質をとらえ、課題解決に挑む

自然環境論 コース
(教育研究分野：自然環境論)

▶ P 96



情報環境に本気で取り組む人のための、数理に根ざした高度の専門性

数理情報環境論 コース
(教育研究分野：数理情報環境論)

▶ P 98



生活環境の課題を発見し、分析し、解決する能力を持つ人材を養う

生活環境論 コース
(教育研究分野：生活環境論)

▶ P100



人間の発達と社会の発展を総合的に捉える新たな学問を創る

社会環境論 コース
(教育研究分野：社会環境論)

▶ P102



環境科学の先端を拓く研究機関との連携による教育・研究

環境先端科学(連携)講座

▶ P104



主な進路

2013年度

- ・いすゞ自動車
- ・英進館
- ・エド・インター
- ・エヌ・ティ・ティ・コミュニケーショーズ
- ・エン・ジャパン
- ・サイバーエージェント
- ・サンエー技研
- ・水登社
- ・清教学園教員
- ・大和ハウス工業
- ・テレビ大阪
- ・日清食品ホールディングス

- ・日本アイ・ビー・エム システムズ・エンジニアリング
- ・日本ビジネスデータプロセッシングセンター
- ・日本電気
- ・日立住友重機械建機クレーン
- ・箕面自由学園教員
- ・大阪府教員(高校)
- ・兵庫県教員(高校)
- ・神戸大学大学院人間発達環境学研究科(2名)
- ・神戸大学大学院システム情報学研究科

2014年度

- ・アップ
- ・医歯薬ネット
- ・インテリジェンス
- ・グッドライフOS
- ・グンゼ
- ・日本製紙
- ・扶桑化学工業
- ・VSN
- ・和歌山県教員(高校)
- ・ニッセイ情報テクノロジー
- ・兵庫県教員(高校)

- ・山田養蜂場
- ・中国空間技術研究院
- ・徳島新聞社
- ・徳潤
- ・ロングライフホールディング
- ・一般財団法人日本自動車研究所
- ・神戸大学大学院人間発達環境学研究科(3名)
- ・京都大学大学院情報学研究科

主な取得可能な資格免許

- ・中学校教諭専修免許状(理科, 数学, 家庭, 社会)
- ・高等学校教諭専修免許状(理科, 数学, 家庭, 公民)

自然環境論 コース

(後期課程：自然環境論教育研究分野)

▶ Course Keyword 【コースキーワード】

- 物質系
- 生命系
- 高い専門性と総合力
- 自然環境の多角的理解
- 異分野との相互刺激
- 地球表層から宇宙まで

自然科学の広い視野を備えて
環境の本質をとらえ、課題解決に挑む

20世紀の科学は専門化、細分化を推進することによって精緻を極め、大きな発展を遂げてきました。しかしその結果として現代社会が直面したのは、気候変動、生物多様性保全、資源・エネルギー問題など、環境問題を始めとして私たちの生存に関わる複合的な科学的諸課題でした。こうした複雑な課題の解決に取り組み、持続可能な社会の構築へと向かうために、今や旧来の学問の諸分野・領域を超えた総合的な知の在り方や、異なる背景や専門性を持つ人々の連携をコーディネートできるような能力・人材が切実に必要となっています。

このような背景を踏まえて、博士課程前期課程の自然環境論コースおよび後期課程の自然環境論分野では、自然環境の成り立ちや、環境と人間の相互作用に関する基礎的研究を行う能力を有し、自然科学的立場から人間環境の具体的諸課題の解決を目指す人材を養成します。そのために、自然環境に関わる物質系、生命系、地球表層から宇宙にいたるまでの幅広く、基礎的な理解を深めるとともに、環境汚染、生物多様性を含む自然環境保全などの人間生活と密接に関係する環境問題に関して深く考究します。カリキュラムには、専門諸領域の多彩な授業科目に加えて、環境科学の大学院レベルの幅広い基礎力を修得する環境基礎物質科学、環境基礎生命科学等の科目群、先端のトピックスを取り上げる自然環境先端科学の科目群の他、サイエンスコミュニケーション演習、インターンシップなどの特徴ある科目が用意されています。これらを基盤として、特別研究や論文作成を通じて研究能力を養います。多様な領域の教員や大学院生の仲間との対話と相互作用の中で、高い専門性と総合力を培い、自然環境の諸課題に挑む意欲ある皆さんを歓迎します。



大学院生からのメッセージ

日本を石油生産国へ。
先端科学を切り開く自負

浅野 貴志 さん(前期課程1年生)

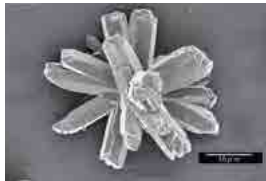
私達の研究室では「榎本藻」という油を生産する藻類の研究を行っています。この藻は植物と同じように光合成を行い、吸収したCO₂を材料に重油を合成し細胞内に蓄える性質を持っています。こう説明されてもピンとこないかもしれませんが、この藻には日本が石油生産国となりうる大きな可能性を秘めています。現段階ではまだまだコストがかかってしまうため、実用化にむけて様々なアプローチで取り組んでいます。

中でも私は、主に分子生物学と遺伝子工学の観点から研究をしています。品種改良のために他の藻類からCO₂の取り込み活性に関わる有用な遺伝子を解析したり、'榎木藻'にそれらの遺伝子を導入し、機能させることでより生産性を高めようとしています。

地球温暖化や資源枯渇が問題視される昨今、この分野は世界中で注目されている最前線の研究であり、そしてこの研究は人々の暮らしを豊かにできる可能性があるのも、とてもやりがいがあります。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当（無印は前期課程のみ）

青木 茂樹 教授[※] 素粒子・宇宙線物理学 ニュートリノ振動実験や宇宙ガンマ線の観測などの研究をしています。	蘆田 弘樹 准教授[※] 光合成・酵素学 植物や藻類の光合成機能の解明と、その環境問題解決へ応用。特に、光合成炭素固定酵素RuBisCOに注目し、この酵素について触媒・機能発現機構、構造活性相関、分子進化など様々な角度から研究を行っています。	伊藤 真之 教授[※] 宇宙物理学, 科学教育 人工衛星等によって得られるデータを用いた宇宙の観測的研究や地域社会における市民科学活動支援システムの構築に関する研究をしています。	牟丸 敦史 教授[※] 植物生態学 送粉者による花形質の進化の解明を目指し、及び送粉ネットワーク構造や水田生態系における希少種(半自然草地の草本, カエル類)の分布特性の解析も行っています。	榎本 平 教授[※] 分子生物学 高増殖性・高重油生産性を有する重油生産藻類<i>Botryococcus braunii</i>の開発に関する研究や遺伝子クローニング技術の開発を行っています。
江原 靖人 准教授[※] 生物有機化学 遺伝子を構成している核酸塩基を改変した人工核酸を合成し、試験管内高速進化法と組み合わせることにより、がん細胞、ウイルスを標的にした新しい核酸医薬を創製しています。	姥名 邦禎 教授[※] 環境物理学, 理論生命科学 地球システムと生命システムの時間発展ダイナミクスのモデル化と、それに基づく地球環境理解に取り組んでいます。	大串 健一 准教授[※] 環境地質学, 地球環境科学 地球環境変動のメカニズム解明に向けた古環境研究を行っています。	齊藤 恵逸 教授[※] 分析化学 化学発光・蛍光を利用した物質の分析法, 有機試薬を用いたイオン選択性電極の開発, ストレスマーカー測定法の開発に取り組んでいます。	佐藤 春実 准教授[※] 高分子化学・環境調和型高分子学 環境にやさしい生分解性高分子の構造と物性について、主に振動分光法とx線回折法を用いて研究を行っています。
高見 泰興 准教授[※] 進化生態学 生物多様性と進化に関わる性淘汰と種分化のメカニズムについて、野外調査, 行動実験, 形態解析, DNA解析などを組み合わせて研究しています。	寺門 靖高 教授[※] 環境地球化学 河川水, 生物が作る鉱物, 地殻を構成する岩石・鉱物などの様々な地球表層物質についての元素濃度や同位体組成を用いた地球環境の地球化学的研究を行っています。	源 利文 特命助教 水域生態学・環境生理学 主に河川や湖沼を対象として, 広い意味での生態学・環境生理学に取り組んでいます。環境DNAなど, 新しい技術の開発も行っています。		



主な授業科目

●後期課程開講科目

- | | | |
|-------------|-------------|---|
| □環境植生学特論Ⅰ | □水環境科学特論 | 後 |
| □植物多様性特論Ⅰ | □環境有機化学特論Ⅱ | 後 |
| □高次生命機能特論Ⅰ | □環境遺伝子工学特論 | 後 |
| □環境創成科学特論Ⅰ | □分析化学特論Ⅱ | 後 |
| □環境地球化学特論Ⅰ | □高次生命機能特論Ⅱ | 後 |
| □環境地質学特論Ⅰ | □生体超分子化学特論 | 後 |
| □宇宙環境物理学特論Ⅰ | □環境創成科学特論Ⅱ | 後 |
| □粒子物理学特論Ⅰ | □理論環境物理学特論 | 後 |
| □自然階層構造特論 | □粒子物理学特論Ⅱ | 後 |
| □分析化学特論Ⅰ | □宇宙環境物理学特論Ⅱ | 後 |
| □環境有機化学特論Ⅰ | | |
| □超分子化学特論 | | |
| □環境植生学特論Ⅱ | 後 | |
| □植物多様性特論Ⅱ | 後 | |
| □環境地球化学特論Ⅱ | 後 | |
| □環境地質学特論Ⅱ | 後 | |

主な学位論文テーマ

● は博士学位論文

- ・月周回衛星SELENE搭載ARDによる月面ラドンガスの変動解析
- ・小型衛星による硬X線走査観測計画FFASTの検出天体評価
- ・小型衛星望遠鏡による宇宙ガンマ線観測計画：次期気球実験の為に原子核乳剤の性能評価
- ・COPIL1胞形成メカニズムの解明のための基礎研究－1次元バンドスティックモデルの確率ダイナミクス－
- ・特異な形態を持つカメノコハムシ亜科の分子系統と形態進化プロセス
- ・遺伝子導入法の開発へ向けたボリオコッカス改良株「稷本藻」のrbcSゲノム全長クローニングと細胞構造解析
- ・オイル生産藻類*Botryococcus braunii*への遺伝子導入に向けた単細胞培養法の開発
- ・インフルエンザウイルスとの結合能を有する糖鎖修飾DNAの合成
- ・花崗岩の溶出実験における主要元素及び希土類元素の挙動に関する研究
- ・六甲山系南部の石屋川水系における窒素化合物の挙動
- ・第四紀後期の親潮水域の古海洋環境変動に関する研究
- ・東松島市宮戸島および石巻市大谷川浜における2011年東北地方太平洋沖地震津波で形成された津波堆積物の堆積学的特徴
- ・環境問題と関係する確率的状態遷移現象のコアモデル－人間の問題としての状態の安定性、変化の急激性、歴史の不可逆性－⁽¹⁸⁾
- ・ガンマ線天体精密観測用エマルジョン望遠鏡の開発と気球実験GRAINEへの実用化⁽¹⁹⁾

研究最前線

蘆田 弘樹 准教授(人間発達環境学研究科 自然環境論コース)

光合成研究から地球環境問題解決に
アプローチする

光合成は、太陽の光エネルギーをCO₂と水から合成する糖という形に蓄エネルギーする生物の反応です。地球上の全ての生命は、この光合成によって生産される糖をエネルギー源とし、光合成なくしては生きられません。また、光合成は、地球大気CO₂濃度の維持に大きく貢献するとともに、人間の生活に欠かせない食糧や燃料などを作り出す反応です。このことから、光合成の理解とその機能応用は、CO₂削減や食糧・燃料増産を可能とし、環境問題の解決と人間環境の改善を可能にすると期待されています。

植物や藻類の光合成でも、鍵となる反応である、大気CO₂の固定化反応を行うのが、ルビスコという酵素です。しかし、ルビスコは、O₂をCO₂と誤認識して反応するため、CO₂に対する親和性が低く、その酵素特性は光合成にとって劣悪です。このため、高濃度のO₂を含む現地球大気下では、ルビスコは自身の持つCO₂固定能の半分も発揮できていません。このようなルビスコのCO₂固定酵素としての非効率性が、様々な局面において光合成生物のCO₂固定を律速しているため、ルビスコは光合成改良のための有効なターゲットです。

以上の背景のもと、ルビスコ機能改良による光合成促進を目指し、いろいろな角度からルビスコを理解するための研究を行っています。このために、様々な光合成生物が持つルビスコの能力の違いに注目し、この違いが生み出される原因を解明しています。また、ルビスコがなぜO₂との反応性を獲得してしまったのか、その分子進化過程を明らかにしようとしています。これらの研究成果をもとに、ルビスコを機能強化し、植物や藻類の光合成能力改良を目指しています。また、光合成能力強化を施した藻類を用いたバイオ燃料の高生産研究も進めています。このように、光合成研究から、CO₂温暖化問題、食糧問題、エネルギー問題といった地球環境問題解決へアプローチしています。



数理情報環境論 コース

(後期課程:数理情報環境論教育研究分野)

▶ **Course Keyword** (コースキーワード)

□高度化する情報環境

□知的環境の数理的分析

□数理科学の高い専門性

□精度の高い問題定式化

□創造的な情報処理

□信頼性の高い問題解決法

情報環境に本気で取り組む人のための、 数理に根ざした高度の専門性

いまや私たちの生活はデジタル情報なしには何も動かないと言っていいでしょう(あなたがしているこのパンフレットも、印刷の直前までデジタル情報だったはずで)。多様化・高度化する情報環境への対応は、現代社会のあらゆる分野で必要性を増しています。そして情報化を推進する中で遭遇する問題に対処できる人材が必要とされています。しかしながら、情報環境のような知的環境では、場当たりの対応はむしろ問題をこじらせることになってしまいます。さまざまなソフトウェアやIT機器を効果的に利用しながら、対象を適切に定式化して問題の解明にあたることが問題の解決に向けての重要な柱であり、さらに数理的手法の利用により、問題の定式化の精度及び解決策の信頼性を高めることが求められます。

本コースでは、このような視点に基づき、数理科学に対する高い専門性を身に付け、情報環境の多様化・高度化に対応して情報環境における諸問題に有効な解決策を提供することのできる人材を養成します。上記の目的を意識して、伝統的な数学に根ざしてはいるが、特に情報環境に関わる諸側面の解明に有効と思われる数理科学の諸分野を重視した授業科目が設定されています。学生は、これらの授業科目の履修を通して、複雑に入り組んだ情報環境に対処するための高度な数理的理論と手法を身につけます。授業科目の履修と同時に、指導教員との綿密な連携の下で具体的な研究プロジェクトを企画・実施することが要求されます。このプロジェクトを遂行する中で、理論を実際の問題の解決のために活用することを体験し、理論に関する知識を生きた素養へと発展させます。日々進化する情報環境に本気で取り組もうという学生を待っています。



大学院生からのメッセージ

プログラムは何を基準に“正しい”と言えるのか

勝山 知紀 さん(前期課程2年生)

私は高校の数学の教員を志望していますが、大学院に進学しました。将来教壇に立った際に数学の面白さを伝えるべき教員自身がその面白をもっと知っていなければならないと感じた私は、さらに2年間で大学院で過ごすことを決めました。私の専門は数理論理学で、CG (Computer Graphics) におけるプログラム検証を研究しています。パソコンの中にあるプログラムが“正しく動く”とはどういうことなのでしょう。プログラムが自分の思った通りの振る舞いをするのが“正しく動く”ということだと考えられます。私はそのプログラムの思った通りの動きを仕様として記述し、比較したり、専用のソフトにかけたりすることで調べています。そして、調べた結果をどのように応用できるのかを考えたいと思っています。

大学院ではセミナーや学会などの刺激的な機会があり、また、温かい先生方や様々な分野の友人との関わりによって充実した日々を感じています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当 (無印は前期課程のみ)
(rp) 2016年3月で退職予定

稲葉 太一 准教授 数理統計学, 応用統計学, データ解析 統計手法は、その適用分野によって異なる側面があります。例えば医学統計の分野では、多重比較法という手法があり、その適用範囲を広げる事を研究しています。	桑村 雅隆 教授 ● 応用解析学 物理学、化学、生物学などに現れる非線形微分方程式を分岐理論や力学系理論とコンピュータシミュレーションを利用して調べています。	阪本 雄二 准教授 ● 数理統計学 ポアソン過程や拡散過程などの確率過程に関して、その漸近分布論と統計的漸近理論、およびその数理ファイナンス・保険数理への応用の研究を行っています。	高橋 譲嗣 教授 ● (rp) 数理論理学 数理的方法全般の数理論理学的手法を用いた理論的考察、及び論証による証明を効率よく理解し、且つ正しく書くために有効な実践的知恵の体系化に取り組んでいます。	高橋 真 教授 ● 情報論理学 無限ブール代数のゲーム論的性質およびモデル検査ツールを用いたシステムの信頼性検証について研究をしています。
長坂 耕作 准教授 ● 計算機代数 数式処理の理論研究 (主に数値・数式融合計算) とその効率的な実装方法や情報システム (主に数式処理システム) を活用した他分野への展開について研究しています。	宮田 任寿 教授 ● 幾何学的トポロジー Shape理論 (局所的に複雑な図形や空間への幾何学的なアプローチの方法) とそのフラクタル幾何学への応用、様々な次元について研究しています。			



主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 統計解析特論

□統計推測特論

□情報数理方法特論Ⅰ

□情報論理学特論Ⅰ

□非線形数理特論Ⅰ

□数式処理特論Ⅰ

□応用幾何学特論Ⅰ

□応用統計解析特論 ●

□非線形数理特論Ⅱ ●

□情報論理学特論Ⅱ ●

□情報数理方法特論Ⅱ ●

□応用幾何学特論Ⅱ ●
- 数式処理特論Ⅱ ●

主な学位論文テーマ

- ・ 数学的主張の証明不可能性の証明－集合論のブール値モデルによる論法の仕組み－
- ・ 時相論理の完全性定理について
- ・ 分岐解析ソフトウェアAUTOについて
- ・ 常微分方程式の分岐理論とその応用
- ・ カルマンフィルタと平滑化における初期化問題
- ・ Finite-to-one mapping theorem for Assouad-Nagata dimension
- ・ A topological approach to digital images
- ・ FDR基準における多重検定問題
- ・ マルチンゲールの収束の仕組み
- ・ 一変数多項式における近似GCDアルゴリズムの性能評価と解析
- ・ ビジュアルプログラミング環境を用いたシステム検証の教育について
- ・ 多重比較における多重帰無仮説に関する誘導関係を考慮した自然なアルゴリズムの構築

研究最前線 阪本 雄二 准教授 (数理統計学)

確率的なダイナミクスを探る 統計解析法と統計数学

数理統計学においては、不確実性を含む情報の信頼性を確率的に評価することが重要です。管理された実験条件のもと繰り返し観測されるデータの場合は、個々のデータ間の独立性が保証され、データの出現法則が正規分布であると仮定できることが多いため、情報の信頼性をテーパー分布やエフ分布を用いて評価することが可能です。一方、データ間の独立性が保証されても、個々のデータが複数個の数値で構成されるベクトルである場合や、時系列データのようにデータ間の独立性が保証されない場合は、情報から帰結される結論の信頼性を正確に評価するのが困難です。その問題を解決するため、統計的漸近展開と呼ばれる 確率分布の近似公式を系統的に求める方法が発展してきました。

私たちの研究室では、データがεマルコフ性と呼ばれる独立性を拡張した性質を持ち、統計量が加法的汎関数の多項式として表される場合について、その漸近展開の研究を行っています。加法的汎関数に関する漸近展開の近似精度は、一般化されたマリアバン共分散の非退化性により保証されることが知られていますが、私たちは、その多項式に関する漸近展開の近似精度がパチャタリア=ゴーシュ写像により保存されることを証明しました。その応用として、M推定量の多項式近似から、M推定量の確率分布の漸近展開を導出しました。この結果は、拡散過程に基づく最尤推定量の漸近展開を典型的な例として含む一般的なものであり、多くの具体的なモデルへの適用が期待できます。

また、尤度比統計量などの検定統計量に関しても、多項式近似を利用して、精度保証付きのラゲール展開を求めることに成功しました。今後は、レビーノイズを含むモデルに対する漸近展開や、鞍点法とよばれる裾確率の高精度近似について研究を進めたいと考えています。最近ではエンドポイントの検出などに有効なFDR基準による多重検定法などの研究も行っています。



生活環境論 コース

(後期課程：生活環境論教育研究分野)

▶ Course Keyword (コースキーワード)

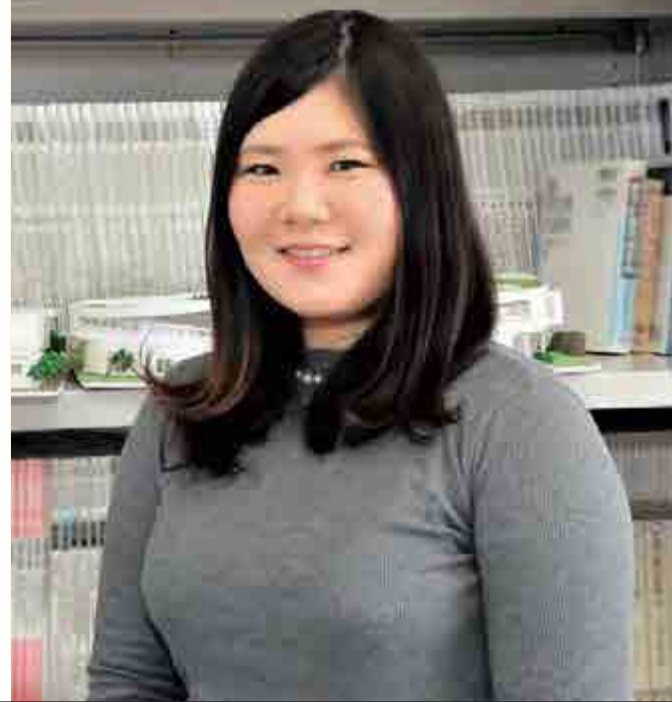
- 生活の質(QOL)
- 安全・安心
- 持続可能
- 生活空間
- 生活技術
- 生活資源

生活環境の課題を発見し、分析し、解決する能力を持つ人材を養う

現代は「流動化」の時代などと呼ばれます。いいかえれば現代とは加速度的に変化し続ける時代でもあります。そこでは日常の生活さえ刻々と姿を変えており、日々新たな課題が生じています。そこで生活環境論コースでは、私たちの生活環境を形成する生活空間・生活技術・生活資源の3領域について、今日的な課題を取り上げ、分析し、問題解決を図ろうとしています。「生活空間」領域では、住居、福祉施設、緑地、都市などの空間の実態を調べ、人間の発達や環境問題の観点から、望ましい生活空間をどのように創造すべきかを追求します。「生活技術」領域では、ハイテク繊維などの機能性製品、生体特性を計測する機器、新しいセンシング技術などが人々の発達をどのように支え、暮らしの環境にどのような変化をもたらしたのか、その実態を把握し、技術利用の方向性を考えます。「生活資源領域」では、持続可能な社会の構築に向けて、植物・食・エネルギー等の生活環境を支える資源の持続的な利用を追求するため、バイオテクノロジー、経済システム、環境・エネルギー、ライフスタイル、安全・安心の視点から分析、評価します。かくも多面的・総合的な私たちの生活環境を探究するため、本コースでは社会科学、人文科学、自然科学と、文系・理系の両方にわたる研究手法を駆使して問題を分析します。ここで学ぶことにより、皆さんは生活環境の形成に関する課題を発見、分析し、解決する能力を持つこととなります。研究者はもちろん、暮らしに関する政策の立案・運営を担う中央ならびに地方行政セクターのキーパーソン、そして地域の生活と環境の課題に取り組むNPO・NGOの担い手などとして、様々な分野での活躍を目指す人々をお待ちしています。



大学院生からのメッセージ



社会にあふれる「なぜ?」に「住宅・都市」からアプローチする

岡田 紗也加 さん(前期課程2年生)

「現代の生活空間をどのように理解し、それへの計画・政策のあり方をどのように構想すべきなのか、という問題をフィールドと理論の双方から考える」というのが私の研究室のテーマです。住居から地区、都市、国土、世界へと広がる空間のすべてに注意を払い、少子高齢化や晩婚化などのさまざまな社会問題に生活空間からアプローチしていきます。私は、教育系の大学で家庭科を専攻していました。家庭科の中でも特に住居分野、「まちづくり」に興味を持ち、まちづくりをより専門的に学ぶために大学院に進学しました。現在は、デイサービスセンターなどの高齢者の施設と保育園などの子どもの施設が併設・合築された「幼老複合施設」と近隣の地域との関わりを調査し、多世代交流のまちづくりを促すことを目的に研究しています。人間にとって「住まい・生活空間」は切り離せない重要な要素です。これからの社会に役立つ、意義のある研究を共に取り組んでみませんか。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)
(rp) 2016年3月で退職予定

井上 真理 教授 [●]	近江戸 伸子 教授 [●]	大野 朋子 准教授 [●]	佐藤 真行 准教授 [●]	城 仁士 教授 ^{●(rp)}
衣環境学, 感性工学	環境バイオテクノロジー	植物環境学	ライフスタイル論, 環境経済学	生活環境心理学
布の風合い(触感)・衣服圧・衣服内気候を、材料特性から実験的、理論的に解析し、着心地の良さをもたらす製品を設計、提案する研究を行っています。	イネ科、マメ科、アブラナ科植物、バイオエネルギー植物を対象にした植物環境学ならびに植物の新機能の開発、器官分化についての細胞・ゲノム・染色体・遺伝子の研究を行っています。	人間活動と植物との関係性を探求し、人が関与した景観の形成とあり方について研究しています。特に人風と農作りの深いタケ類について、東南アジア諸国でのフィールドワークを中心に生態や文化、遺伝的多様性に関して複合的に分析し、竹林の維持や管理に関わる問題について研究しています。	環境・資源制約のもとでの経済システムと、そのときの人々のライフスタイルの分析を中心に、生活の質と社会・環境・経済の持続的発展について研究しています。	身近な生活環境での人間活動の心理学的解明を行っています。研究者と研究対象者の協同的実践で新たな人間科学的意味の再発見に努めています。
白杉 直子 教授 [●]	田畑 智博 准教授 [●]	平山 洋介 教授 [●]	福田 博也 准教授 [●]	矢野 澄雄 教授 [●]
食環境学	環境システム工学	生活空間計画	生体電子計測, ヒューマンエレクトロニクス	振動工学, バイオメカニクス
茶園をフィールドとした農地の多施肥による地下水の窒素汚染低減化、および有機酸の塩塩増強・抑制効果(ハエ味細胞を用いた電気生理学実験による評価)の研究を行っています。	地域、個人等、様々なレベルにおける社会・経済活動とそれが及ぼす環境影響を体系的に解析し、持続可能な社会を構築するための手法論を開発するとともに、実学への展開方法を提案する研究を行っています。	住居からコミュニティ、都市にいたる生活空間をどのように構想すればよいのか、という問題を理論と実証の双方から考えています。	温度・湿度・光強度といった環境要因をコントロールした生活空間において、いろいろな環境刺激に対する人や植物の生体電位応答について研究しています。	日常生活動作の力学的な分析や身体機能・特性の計測を行い、福祉・介護や健康科学関連の機器・用具の開発および経験やノウハウを形にする研究を行っています。



主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 生活空間計画特論Ⅰ
- 機械機能応用特論Ⅰ
- 生活環境心理特論Ⅰ
- 植物環境学特論Ⅰ
- 食環境学特論Ⅰ
- 衣環境特論Ⅰ
- 環境バイオテクノロジー特論Ⅰ
- 電子応用機能特論Ⅰ
- 生活環境共生特論Ⅰ
- ライフスタイル特論Ⅰ
- 生活空間計画特論Ⅱ
- 機械機能応用特論Ⅱ
- 生活環境心理特論Ⅱ
- 植物環境学特論Ⅱ
- 食環境学特論Ⅱ
- 衣環境特論Ⅱ
- 環境バイオテクノロジー特論Ⅱ
- 電子応用機能特論Ⅱ
- 生活環境共生特論Ⅱ
- ライフスタイル特論Ⅱ

主な学位論文テーマ

● 博士學位論文

- ・淡路島における再生可能エネルギー供給可能量の空間的・定量的分析
- ・世界遺産と地域空間計画
- ・24時間定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業の追跡研究
- ・バイオ燃料植物ジャトロファの早期開花遺伝子組換え創出に関する研究
- ・犬の都市空間ーベットの飼育をめぐる分離と共存ー
- ・公営住宅ストック削減計画の研究
- ・歩行分析のための鉛直床反力と3軸加速度の無線計測システムの構築
- ・下肢筋における等尺性筋収縮時の筋出力変動が立位姿勢の安定性に及ぼす影響[●]
- ・一般在宅高齢者における筋力トレーニング行動開始への介入アプローチ[●]
- ・植物における画像解析法の開発に関する研究[●]

研究最前線

大野 朋子 准教授(植物環境学)

植物利用の知恵と伝統から地域景観の成り立ちを読み解く

私たちは、多くの植物を利用しながら暮らしています。食糧、薬、資材など植物の持つ有用な成分や機能を利用することはもちろんのこと、それ以外にも植物は鑑賞や遊び、祭祀にもかかわって、人々の心を癒やし、私たちの生活に彩を与えてより豊かなものにする役割も持っています。このような植物利用は、民族、地域によって使用される植物の種類や方法、呼び名などが異なり、それぞれの歴史や文化的背景のもとで、固有の植物利用の文化を形成してきました。この植物利用の結果として地域、民族独自の多様な植物景観が創り出されていると考えています。人間の植物利用が創り出す景観の成り立ちを深く追求することは、現在問題とされている外来種の拡散や生物多様性の劣化など様々な環境問題を解決する糸口であるとともに、多様な景観の保全と創出や環境緑化の基礎です。

具体的には、タケ類を中心として人と植物の関係性を探り、地域景観の形成についてフィールド調査、研究を行っています。タケ類は、アジアを中心とした広い範囲に分布し、世界には111属1030~1100種存在するという多目的利用される重要な植物資源です。特に東南アジアに暮らす少数民族の生活の中には、目的にあった多種多様なタケ類の利用が見られ、その中には葬式や結婚式、神事など民族のアイデンティティを象徴するために必要不可欠なタケ類が存在しています。このような重要なタケ類は、人間によって持ち運ばれ、本来の自生地を離れて栽培、維持されているのです。人間が創り出した地域景観の形成について、民族学と植物学、景観生態学からの視点を取り入れて文理融合型の幅広い研究を行います。

調査地で出会う多様な風景と人々の暮らし、その関係性を「植物」をキーワードとして読み解くことは、まるで宝探しをしているかのような楽しみを感じさせるものであり、発見し、探究することへの喜びをあたえてくれることでしよう。



社会環境論 コース

(後期課程：社会環境論教育研究分野)

▶ Course Keyword (コースキーワード)

- ☐ グローバル化
- ☐ 新自由主義
- ☐ 地域社会
- ☐ 第三世界
- ☐ 文化変容
- ☐ 公共性

人間の発達と社会の発展を 総合的に捉える新たな学問を創る

私たちの社会は多くの矛盾や問題を抱えたまま、ついにここまで来てしまった——いま、私たちは多くの場面でそう痛感してはいないでしょうか。例えば、福島第一原発事故は、電力多消費型の産業構造や都市生活の脆さと、原発さえ「誘致」せざるを得ない地域社会の苦境とをあらわにしました。世界的な経済危機はグローバル資本主義の矛盾を、政治の混迷は現代社会における公正と連帯の空洞化を露呈させています。真っ当に働いて暮らすという希望さえ叶い難く、第三世界の最も貧しい人々が先進諸国の利害に振り回される。まるで私たち人間は自らの社会を制御できないまま、破局へと突き進んでいるかのようです。

しかしその一方で、矛盾に満ちたこの社会を創りかえ、真に「発展develop」させるのも、究極的には一人一人の人間の「発達development」と社会的協働、そしてそれに基づく「類」的發展に他なりません。だとすれば、人類がその生存をかけて、危機に至った自らを問い直し、自己変革=社会変革を進めることこそ、いま最も切迫した課題ではないでしょうか。しかもそのためには、既存の学問領域(政治学、経済学、法学、歴史学、地理学、社会学…)の成果を吸収しつつその殻を破り、人間と社会を統合的に把握しなければなりません。このように、人間発達と社会発展の相互連関を解明すべく総合的な社会把握を追求する新しい学問、それが【社会環境論】です。

もちろん新しい学問の創造というチャレンジは容易ではありません。【社会環境論】はまだ羽ばたこうとする途上にあります。そしてこの新しい学問が大きく羽ばたけるかどうかは、真剣に学ぶ熱意を持った皆さんの参加と協働にかかっているのです。

ぜひこのチャレンジに参加して下さい。私たちスタッフは皆さんとの協働を願ってやみません。



大学院生からのメッセージ



歴史文化を織りなおす 住みよい町の未来像

張 超越 さん(前期課程2年生)

私は中国河南省出身の留学生です。私は「文化保存型のまちづくり」をテーマとして、中国洛陽市の麗景門歴史文化街区の保護と開発について研究しています。洛陽は中国の「八大古都」の一つで、物語性に富みまちです。近年中国では、歴史街区をめぐる修景開発の動きが相次いでいます。しかし、大規模な改造修景運動は、伝承し続けられた文脈を分断する危険があります。また、改造のため地元住民が追い出されることによる反発運動など様々な問題を抱えています。

私は、現代洛陽市における歴史街区の実態に迫るとともに、いかに地域にねざした文化的要素を保存しつつ、現代社会で活用するのかについて、その背景や今後の展望を考察していこうと考えています。そのために、建物や制度などのハード面だけではなく、特に生活様式、民俗など文化の中身の伝承、コミュニティーの保存などのソフト面を追跡したいと考え、日々研究を進めています。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 前期課程・後期課程担当(無印は前期課程のみ)

浅野 慎一 教授 [●]	井口 克郎 講師	岩佐 卓也 准教授 [●]	太田 和宏 准教授 [●]	岡田 章宏 教授 [●]
社会文化環境論, 社会学	経済学, 社会保障	社会政策	途上国政治経済	社会規範論, イギリス統治構造論
国境を越えて移動する人々を主な対象として、歴史に翻弄されながらも、自ら主体的に新たな歴史を創り出す諸個人の生活や行為について研究しています。	人間の生活と発達を保障する社会保障制度について、医療・福祉分野を中心に研究しています。特に災害被災者の生活保障に取り組んでいます。	新自由主義的な制度改革と社会編成が進行するなかで、雇用のルールはどのように変容してきているのか、賃金問題などを焦点に研究しています。	グローバル社会の抱える諸問題を発展途上国に焦点を当てて研究しています。特に開発政策と政治構造のあり方についてを検討しています。	近現代におけるイギリス地方自治の形成と展開を検証しながら、この国の特質である住民自治をとおして公共性の内実と実現形態を検討しています。
澤 宗則 教授 [●]	橋本 直人 准教授	山崎 健 教授 [●]		
人文地理学, 地域社会論	社会思想, 社会学史	都市地理学		
グローバル化にともなう地域社会の変容、特に開発途上国インドの農村の変化、先進国の移民社会の形成について、人文地理学の視点から理論的かつ実証的に研究を行います。	近代の内在的批判を主題として、M.ウェーバーの社会理論の形成過程、またフランクフルト学派とポスト・コロニアル思想との連関を研究しています。	日本および中国の大都市・大都市圏の地域空間構造の形成と変容について、地理学的手法を用い、理論的・実証的両側面から考察研究を行っています。		



主な授業科目

● 後期課程開講科目

- ☐ 都市地域構造特論Ⅰ
- ☐ 都市地域構造特論Ⅱ[●]
- ☐ 農村地域構造特論Ⅰ
- ☐ 農村地域構造特論Ⅱ[●]
- ☐ 国際社会構造特論Ⅰ
- ☐ 国際社会構造特論Ⅱ[●]
- ☐ 社会変動特論Ⅰ
- ☐ 社会変動特論Ⅱ[●]
- ☐ 労働社会史特論Ⅰ
- ☐ 労働社会史特論Ⅱ[●]
- ☐ 比較社会規範特論Ⅰ
- ☐ 比較社会規範特論Ⅱ[●]
- ☐ 社会環境思想史特論
- ☐ 産業社会構造特論Ⅰ

主な学位論文テーマ

- ・現代日本における学校教育の社会学的分析—ウェーバー理論を通してみた官僚制と教育—
- ・エーリッヒ・フロムにおける社会変革の可能性
- ・自然法則と意識性の分裂を超えるために—マルクスの学位論文を題材として—
- ・The impact of climate change on political cooperation in small island countries: A case study of KIRIBATI ADAPTATION PROJECT (KAP)
- ・持続可能な観光まちづくりの視点からみた海洋観光開発
—中国海南省三亚市西島を事例として—
- ・持続可能な地域社会に向けた協働のあり方
—日本におけるボランティアツーリズムとその可能性—

研究最前線

太田 和宏 准教授(社会環境論)

現実社会と対峙した知的チャレンジを!

フィリピンにおける貧困問題、貧困政策を軸に国家のあり方について研究をしています。なぜフィリピンでは貧困問題が解決しないのか。一見単純なこの問題の背景に、さまざまな社会関係や利害構造がひそんでいます。フィリピンは他の途上国に比較しても政府が組織的に貧困対策に取り組んでいます。世界銀行や国連などの国際機関の支援活動も積極的に行われています。さらにNGOなど市民運動が広く展開しています。にも拘らず、貧困の解消は他国に比して緩慢です。こうした相矛盾するひとつひとつの要素を読み解きながら分析を試みています。国家機能、国家・市場関係、市民社会構成などに分節化しながら問題の所在を探っています。さまざまな問題を掘り下げて検討してみると、常識的理解のみならず一般的学問領域における共通理解さえも、さほど自明でないという場面にしばしば遭遇します。例えば、政府政策が決定され施行された際に、多くの社会構成員がそれに従うことが求められ、またそれを前提に学問的思考も成り立っています。しかし、フィリピン社会の現実を見ても、政策ができたものの多くのものがそれに従わないばかりか、政策を決定した当の本人らがそれを履行する意思すらなく、むしろその政策を利用して自らの利益に供してしまうことがよくあります。国家機能の基本的部分が前提された状況と大きく異なるわけです。

さてそれをどう考えるかです。実態を規範的国家機能の「不足」、つまりフィリピン国家の「不十分さ」とみなすのか、あるいは国家機能の前提そのものを流動的に捉え国家のあり方自体を疑うべきなのか。ああでもない、こうでもないといつも悩みながら、同時に思考することを楽しんでも感じます。

学問とは現実と進行する実態の本質をどのように読み取り、そして実社会にどのように還元していくのかという知的作業です。領域は違えど、そんな知的挑戦をぜひ多くの方にしてもらいたいと思っています。



環境先端科学(連携)講座
(後期課程のみ)

▶ Course Keyword (コースキーワード)

□大気環境科学

□健康工学

□温室効果ガス

□オゾン・エアロゾル

□バイオセンサ

□生体ストレス

環境科学の先端を拓く研究機関との
連携による教育・研究

人間環境学専攻には、博士課程後期課程の連携講座として「環境先端科学講座」が設置されています。この講座は、体系的教育を行う大学院と環境科学の先端的研究を推進する中核的研究機関の連携を通じて、次代の環境科学を担う人材を養成することを目的とします。現在、大気環境科学、健康工学の2分野について、国立環境研究所、産業技術総合研究所との連携のもとで環境科学の基礎から実践にわたる教育と研究を行っています。具体的研究テーマとしては、大気中の

オゾンおよびエアロゾルの生成・消滅に係わる化学過程の研究、温室効果ガス濃度の増加とその変動要因の解明、生体および環境分析への応用につながるマイクロ分析システムの研究開発、ナノバイオテクノロジーを利用したバイオセンサやマイクロ流体デバイスの研究開発と環境汚染や生体ストレス応答モニタリングの実証研究に関する研究などがあります。

スタッフと研究分野・研究テーマ

● 後期課程のみ担当

今村 隆史 教授 ^①	永井 秀典 准教授 ^②	向井 人史 教授 ^③	脇田 慎一 教授 ^④
大気化学, 化学反応論, 光化学	マイクロ流体工学	環境化学	環境分析化学, ナノバイオ計測工学
大気中でのオゾンや微小粒子の生成・消滅反応、オゾン層破壊機構、および大気中での化学物質分布やその変化と気候変動の関係について研究しています。	単一細胞から遺伝子を高速に増幅する技術や、イムノアッセイ及び電気泳動等の分析技術をオンチップ化したマイクロ分析システムに関する研究を行っています。	温室効果ガス濃度の増加とその変動要因の解明、人間活動による環境中の汚染物質等の物質循環や濃度変化の検出、越境大気汚染に関する科学的知見の集積に関する研究を行っています。	ナノバイオテクノロジーを利用したバイオセンサやマイクロ流体デバイスの研究開発と環境汚染や生体ストレス応答モニタリングの実証研究に関する研究を行っています。

主な授業科目

● 後期課程開講科目

- 大気環境科学特論 ^①
- 大気化学特論 ^②
- 環境ストレス科学特論 ^③
- 生体環境先端計測特論 ^④



特命助教の研究最前線

源 利文 (水域生態学・環境生理学)

環境DNAで解き明かす水の中の生物多様性

水域の生物多様性の減少は深刻な地球環境問題の一つで、生物多様性減少の影響は我々の生活に様々なかたちで負の影響を与えていると考えられています。私の研究室では、どのような生物が、どこに、どれだけ生息するのかを迅速に把握するツールとして、環境DNA分析手法の開発を進めています。ここでいう環境DNAとは生体外に存在するDNAの総称で、例えば魚類や両生類の場合、糞や粘液を通して環境中にDNAを放出しています。環境中のDNAを回収し、リアルタイムPCR法、デジタルPCR法、次世代シーケンシングといった比較的新しい技術を用いて、そこにどんなDNAがどれほどあるのかを明らかにすることで、水中の生態系の様子を覗き見ることができます。このような分析手法は近年急速に発展しており、私の研究室は国内の環境DNA研究をリードしていると自負しています。こんな興味をもった方、是非一度研究室にあそびに来てください。



Runsinarith Phim (開発経済学)

持続可能な発展のための人間発達と自然資本蓄積

私は人間発達環境学研究科の特命助教をつとめております。2012年に名古屋大学の国際開発研究科において博士学位を取得して以来、貧困と持続可能な発展に関する問題に経済学的知見を当てはめて考えることに関心を持っています。現在の主なテーマは人口減少と外的ショックを想定した持続可能性の経済分析です。特に、人工資本、人的資本、自然資本といった様々なタイプの資本ストック変化の推定精度の向上に取り組んでいます。こうした包括的な資本ストックに関するデータ・セットを用いて、「新国富」と呼ばれる持続可能性指標との関連を実証研究しています。また私は発展途上国における貧困削減にも関心があります。これまでの研究でも、カンボジアにおける貧困の決定要因を分析するために、農村部における調査によって得られたパネルデータや横断面データに様々な回帰分析を適用し、社会的インフラやマイクロ金融が貧困削減に果たす役割を明らかにしました。



古川 文美子 (地域研究・資源保全)

「資源」を通して人間環境をみる
ーマングローブ資源利用と保全ー

私達の日常に溢れる多くの「物」には、熱帯地域からはるばる運ばれてくる資源も少なくありません。近年、このような市場価値のある資源は、熱帯雨林の荒廃や地域環境保全など地球規模の問題と結びつけながら研究されてきました。私は、特にマングローブの資源利用とその保全に注目しながら研究を行っています。日本人にとっては、あまり身近な生態系ではありませんが、熱帯・亜熱帯の沿岸域に住む人々の生活や生業を支えてきた存在です。そして、私たちもマングローブ炭や水産資源の利用を通して、その恩恵を受けてきました。現在、東南アジア諸国では植林活動によるマングローブ再生が、国家からコミュニティまでの様々な規模で試みられています。私は、生態系修復という視点だけでなく、地域住民の資源利用を通じた社会との関わり合いの視点からマングローブ植林地を再評価することで、マングローブと地域社会の新しい関わり合いを模索したいと考えています。

